
金木犀のプラネタリウム

稲垣圭吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金木犀のプラネタリウム

【Nコード】

N8195K

【作者名】

稲垣圭吾

【あらすじ】

幸せとは何だろうか、と考えれば考えるほど、その無情さに気が付かされ溜息をこぼすばかり。その幸せの一つに恋愛がある。しかし、この日本において、その形は一对一だ。それが一对二、一对三になった場合、その幸せはどこに行くのか――

プロローグ

俺には夢がある。

——嘘だ。そんなものこれっぽっちもありはしない。

小学生の頃は逸遊に勤しんではヘラヘラ笑って楽しい毎日を存分に謳歌していた。卒業文集にも『プロ野球選手になりたい』とか『宇宙飛行士になりたい』とか叶うはずもない壮大な夢想を無邪気に書き記していたのだろうが、生憎と現実社会に摺れてひねくれてしまった俺は純粹だった頃のそんなこっ恥ずかしい思い出なんざとくくデリート済みだ。

夢のような六年間を経て中学生になると大人はその夢に現実味を帯びさせようとする。本当に自分がなりたいもの、やりたいこと、この世に五万どころか五億とありそうな漠然とした選択肢の中から何か現実的なものを子供に見つけさせようとする。

俺からしてみれば、それは子供に夢を見ることを止めろと言っているも同然のように聞こえたものだ。

そして高校生にもなれば、その雑音は耳を劈くほどのものとなる。早いヤツは高一の頃から進学塾に通い始め、三年後に控えた受験戦争を勝ち抜くための戦闘力をしこたま頭に叩き込む。そんな高校生の頭の中にあるのは、大人から植え付けられた実際に叶えるために夢と勘違いさせられた夢っていう名の現実なんじゃないかと思うのだがどうだろう。

その時分になれば、周囲の大人は『いつまでも夢を見てるんじゃない』とか喚き始めるしな。一体どっちだっただ。

この世には、そんな相反する言葉に曰で挽かれる小麦のようにゴリゴリ転がされて、将来なんてモノに想像を膨らませられない子供が増えているんじゃないかと思えてならないね。ま、かく言う俺もその一人なんだけど。

なんて、大仰に語っておきながら俺が言いたいのはそのような事では

ない。本題は、何のために夢を持つのかって事だ。

答えは一つ。幸せになるためだ。

とか、自分で口に出しといて現実味のない言葉だな。幸せ？ 何だそりゃ。何になつたら幸せなんだ？ 夢だと思い込んだ現実味のある確立で実現可能な未来を手繰り寄せたら幸せなのか？ 好きな人と結婚したら幸せなのか？ 長生きしたら幸せなのか？

まあそのどれもが幸せなんだろうさ。俺は一つも該当しないから分らないけど。

でもその幸せには人数制限があるんじゃないだろうか、と思う。例えば大学生が希望の企業に就職できたとなれば自分の代わりにその企業に入社できない人が居る。例えば女性が好きな人と結ばれて結婚したとなれば相手のことが好きだった別の人は悲恋に慟哭するんだろう。

幸せになると人はどう思うんだろうな。自分は幸せだから嬉しいのか、他の人を蹴落として幸せになってしまったから悲しいのか、幸せってこの程度かと落胆するのか。

そう考えると、なんだか幸せってつまらないな。

どうだ、このひねくれっぷり。何せ俺も時々脳ミソがどうかしてるんじゃないかと真剣に悩む時があるくらいだ。ある種の人から見たら不良なんだろう。高二にもなつて志望大学を決める事すらせず、というか大学の名前すら知ろうとせず、本気で努力して所望の大学のブランドを狙っている人からすると俺なんて目障りでしょうがないんだろうな。

それでも、こればかりはどうしようもない。何も思いつかないんだから。

夢って何だ？ 幸せって何だ？ 喜びって何だ？

こんな漠然とした言葉を漠然とした頭でばーっと考えながら既に高二生活も無気力なまま五ヶ月が過ぎた頃――俺は出会った。

――幸せを勘違いしたアイツに。

第一話

傘を持っていない時に限って雨に降られ、持っている時に限って空はカラッカラ——これは、この世に生ける全ての人が味わったことのある神様の創りし不条理システムの一つだろう。暇を持て余した神様のそんな戯れに付き合わされてこっ酷い目に遭った苦い思い出のある俺は、それ以来常時折り畳み傘を持ち歩くようにしている。なので、本日のこの突然の雨天でも神様のお茶目に巻き込まれる事は無かった。現在夜六時。

九月も中旬に入って短くなり始めた日照時間のため暗くなるのも早くなった今日この頃。足取りも軽く家路の商店街を突っ切り、看板に明かりをつけている馴染みの店に顔を出して冷やかしたりしつつ、部活帰りの家路を満喫していた。

神様を出し抜いた気分になって、ひねくれていると自覚している俺でも今はささやかな喜びを感じており、上機嫌だった。

だから、ソイツに声を掛けようなんて思ってしまったんだろう。

もっさりした木の下で雨宿りしている同じ高校の制服を着た女生徒に。

「傘、入ってくか？」

「……………」

返事は返ってこない。少女は雨が当たってザアザア音を立てる梢を見上げるばかりだ。

「……………」

これは俺の沈黙。

「……………」

これは彼女の沈黙。

「……………ふう」

世の中こんなもんだろ。

好意で声を掛けても返事すら返してこない。

ま、人生穏便に生きていきたい俺としては、人間関係は重要だ。
こんなことで気を立てることも無い。

でも、この世界の人はこんな経験を経て好意とか優しさとかを忘れていくんだろうな。

俺は踵を返す。そういえば好きなクイズ番組が今日スペシャルだ
つけ。そんなテレビ主体の計画を立てながら俺は再び家路に復帰し

「ぐおうあ！」

—— ようとしてできなかった。なぜなら……

「ねえ、あなた」

後ろから木の下に引つ張り込まれたからだ。その際、俺の腕に彼
女の腕が絡められちよっとドキリとしたのは不可抗力。

急に引つ張られたせいで雨に濡れていた傘から飛沫が飛び制服の
所どころに染みを作ってしまう。

もちろん彼女にも掛かってしまったが、そんなことはお構いなし
な様子だった。それ以前に彼女の制服も濡れていて、ブレザーなの
が誠に遺憾…… いやいや冗談。背中の半ばまである長い黒髪からも
雨の雫が滴っている。

「あなたには、何が見える？」

彼女は上を見上げたまま俺に問い掛ける。訝りつつも隣で倣って
みるが、

「何が見えるって……。木、だろうが」

当然ながら、もっさりした木が見えるだけだ。葉が多く、空の色
だって見えない。でもだからこそ雨宿りとして機能しているのだろ
うけど。

「それだけ？」

俺に視線を合わせる。てか、それ以外にあるのか。

「それだけ」

「ふふ」

笑われた。

「幸せ」

何だと？

「……俺、馬鹿にされてる？」

「そんな。滅相もない」

さも驚いたように言わなくてもいいだろ。ますます腹立たしい。とは言っても最近の若者みたいにすぐキレたりしない俺はちよつと顔を顰めるだけに止めておいたはずだったが、彼女はそれをキレる寸前だとも思ったのか、なだめるように手をひらひら振ると再び顎を上げた。

「私には宇宙が見えるわ」

「はあ？」

……これはヤバイ人に声をかけてしまったつばい。言うに事欠いて樹木見上げて宇宙が見えるとは。

はあ、勝手にコスモ感じてろよ。星座なんて自分の生まれた月の蠍座しか知らん俺にセイントな話をされてもさすがに付き合いきれそうにない。自分から声を掛けておいてどうかと躊躇したりもしたが、初め無視されたお返しだ。俺は彼女の腕を解くと歩き出そうとする。

しかし、彼女はその背に声を掛けてくる。

「あなたには見えなかった？」

「見えなかったよ。ありがたい事に」

「そう」

たった二文字のはずの返答には多分にハッピーなニュアンスが感じられ、俺は振り返ってしまった。それを見越していたのか、待ち構えていたようにバツチリ一瞬で俺と目を合わせると、もう一度彼女は俺を馬鹿にしてきた。

「ふふ、幸せ」

「……喧嘩売ってる？」

買わないけどさ。とりあえず訊いてみる。

「そんな。滅相もない」

数秒前に聞いた気のするセリフが俺の耳朵に届いた。これは時間の無駄だな。

「あつそ……、……！」

彼女に背を向けた瞬間、突風でも吹いたかのように俺の手から濃紺の折り畳み傘がすっぽ抜けたと思ったら、背後から強襲してきた彼女に強奪されていた。

そこは既に樹冠の外。つまり、俺は神様の兇戯に付き合わされるがまま。

呆然とする俺に彼女は傘を持ったままクルツと半転すると、これ以上ないくらい幸せそうな笑みを見せつけ、こう言った。

「もう少し、ナンパの第一声は考えた方がいいわよ」

パチンコ屋のネオンライトに煌めく烏の髪を靡かせながら颯爽と走り去る彼女。その背中を見つめながら最後に残っていた笑顔を思い出して、俺は雨に全身を殴打されるのも気にせぬままに一人ごちる。

「ちつきしょ、………可愛いじゃねえかよ」

神様も変なところで手抜きが無い。ちゃんと二物は与えないんだからな。

でも、これは希望でも何でもなくて、アイツとはまた近い内に会う気がする。同じ学校の制服だったし、何より神様に遊ばれなかった俺の必須アイテムを返してもらわないといけないしな。

不本意ながら今日は貸しといてやるよ。その傘。

ビシバシ俺を叩く雨も、火照りを冷ますには丁度いいさ。

第二話

「カットマンやってくれカットマン。なあなあ松下あ」

「俺は松本だ。ボケ加藤」

青春を謳歌するが如く降りしきる雨の中を走って帰ったのは昨日のこと。帰ってすぐに風呂に入ったので、風邪菌に負けることも無く何とか事なきを得た。

それとも、その時だけは俺の頭が馬鹿になっていたのか。あんな会話の後だったしな。それも無理はない。

現在の時刻は授業開始前の午前七時四十五分。

ただ今、体操服に着替えた俺はブルーの長方形の卓を挟んで同じクラスに加藤と向かい合っていた。

「サア！」

流行に乗せられやすいコイツの叫びからも俺たちが何をしているのかお分かりいただけるだろう。つまるところ、卓球部の朝練だ。

いつもの事だが、この場に顧問はいない。『朝っぱらから面倒くさい』んだそうで、卓球場の鍵を生徒に預けるという教師としてあるまじき行為にも躊躇いなく手を染める。そんなダメ人間がこの卓球部の顧問、高橋女史だ。そのお陰で部員が団結できてるってポジティブな解釈をするやつもいるみたいだけど、俺は断じてそれはないと思う。

何の変哲も無い下回転サーブを繰り出してくる加藤に望み通り力ツトで返してやりながら、向こうにしてみればさぞ気持ち良さそうな大振りドライブを打ってくる。そのまま十数往復ラリーを続け、満足そうなどや顔を浮かべる加藤に腹が立ってきたので俺も攻勢に出ることにした。

一気に前に出てドライブをドライブ返し。それはヤツの球以上の回転を伴って相手コートの左奥隅にバウンドし、シュルシュル言いながら向こうの壁にぶつかりやがてその動きを止めた。

加藤が恨めしげな目で見てくるが、それがどうした。

「何で攻撃すんだよー」

「カットマンだって攻撃するぞ。ドライブ打つ事だけに酔いしれていたお前が悪い」

「ちえ、つまんね」

「何のための練習だボケ」

見当違いにも不貞腐れた加藤は自分の荷物が置いてあるところまで歩いていき、タオルを乱暴に手に取ると汗を拭い始める。天パの髪をこれまた乱暴にわしゃわしゃとタオルで拭いている。

練習相手のやる気が冷めてしまったため、手慰みにシェークハンドのラケットを掌の中でクルツと回す。一人でサーブ練習するのもなんだったので、俺も相方に倣って自分のタオルを引っつかみ一服することにした。

スポーツドリンクをぎゅぎゅ喉に流し込みながら顔面の汗を拭っていると、誰かの足音が近づいてくるのが聞こえた。

「何よマツ。あんた、もう休憩？ 体力無いわね」

タオルを取り払ってみると、俺の目の前に体操服を着た一人の女子が立っていた。ミディアムボブでナチュラルブラウンの明るい色の髪に対して怜悧に細められた瞳が何ともサディスティック。この呼び方からして思い当たる人物は一人しかない。

「あ、奈津子ちゃん。はよー」

登場した途端に顔を綻ばせて挨拶したのは加藤だ。

「あ、うん。おはよ。隆くん」

奈津子ちゃんと呼ばれた少女（本名相川奈津子）は加藤（本名加藤隆）の声に一転、朗らかな笑顔を浮かべると朝の挨拶を返す。先に休憩始めたのは加藤なのに、俺に声を掛けるときとはまるで別人だ。

ま、それもそうだろう。この二人は付き合ってるんだからな。俺としたら高校生の男女がファーストネームで呼び合ってるってのが既に信じられないが、これは俺の方が男として色々遅いんだという

ことに最近気付いたので嘲弄は勘弁。

それから二人はにこやかに会話をスタート。何も見せ付けるように話さんでもよかるうに。いや、この場合は俺のが邪魔なのか。俺がキューピッドになってやったつてのに、その恩は記憶にないらしい。

「へいへい、お邪魔しましたよ」

「おう邪魔だ邪魔だ。とつとと去れ、この陰険カットマン」

「全てのカットマンに謝れ。あと俺は本来カットマンではない」

立ち上がりざまに加藤に一言くれてやると、俺はそのまま歩き出す。向かうのは受験勉強の息抜きにと朝練に参加している男子卓球部部長とその相方さんが猛烈に打ち合っている台の横。そこに小さく体育座りすると小気味いいカコンカコンという音を連続させる二人の打ち合いに見入った。

およそ卓球部には勿体無い百八十センチ以上の身長を誇る男子卓球部元部長の平野先輩は県大会ベストエイトの常連だった。最後の大会では残念ながらそこまで届かなかったものの、その実力は我が校男子の中でも屈指。加えて整った相貌に清潔的な黒髪短髪、理知的な眼鏡も相まって部長の男前度は相乗効果で鰻登り、それはそれは同じ男として嫉妬のしようがないほどの美男子だった。

相方さんの橘先輩も短めの髪を少し脱色しているが、それでもやはり見目良く卓球の実力も相当ある。大会のために二人が揃って学校を効欠することもしばしばあった。

白熱した打ち合いもやがて橘先輩が追い詰められ、部長のドライブが台のエンドライン上にバウンドし、一分は続いたラリーに決着が付いた。

ふう、と満足そうな笑顔を交し合った二人は台の脚を繋ぐ横棒に掛けてあったタオルを手に取る。それを見ながら俺は声を掛けた。

「さすがっすね。部長も、橘先輩も」

「何言ってるんだ。今の部長は松本だろう？ 僕は元だよ」

「俺がまだ現役だった頃に一度も勝たせてくれなかったくせに。な

にがさすがだっつーの」

この高校には卓球部専用の卓球場が体育館の二階に設けられていた。目の前の二人を含めた先輩たちが華々しい成果を残してくれたお陰で学校側も卓球部にお金をかけてくれているのだ。そのため部員に押し掛けってくるプレッシャーも大きいが、幸運にも毎年すごい選手が出てきてくれるお陰で、その恩恵を現在も享受し続けている。

設備が充実していることもあって卓球というマイナー球技にもかかわらず毎年男女合わせて十人以上の入部希望者が来てくれ、三年生が抜けた今でも男女合わせて三十人以上の部員が所属している。

一応男子卓球部と女子卓球部はそれぞれ独立しているのだが、練習場所は同じ卓球場なので、特に陣地の奪い合いなどもなく仲良くやっていた。部長や橘先輩の代までは男子が目立った成績を残す事が多かったが俺たちの代はやたらと女子が強い。しかも今年の一年生には卓球推薦で入ってきた女子が一人おり今後の女子卓球部の著しい興隆を予想させた。

また、我が校卓球部では男子女子ともに伝統として学年の最優秀選手が部長と副部長の禪を継ぐ決まりがあり、俺も今のところは学年で一番強いということになっている。つまり平野元部長が部長だった頃には俺が副部長。現在は俺が男子の部長で、一年の最強少年進士君が副部長を務めている。

「それで、どうしたんだ？ そんなに縮こまって」

「……練習相手が理不尽でして」

三年生の二人は俺が先ほどまで練習をしていた付近に目を向ける。そこで相川と談笑している加藤の姿を見つけたようだ。緩んだアイツの表情からは、練習に復帰する気配なぞ微塵も感じ取れない。

「……ああ、加藤か」

「そういえば、何でお前はいつも加藤と組んでるんだ？ あいつ、お前の相手できるほど強かったっけ？」

橘先輩が首を捻る。

「……それでも、二年男子で俺の次に強い、アイツですから。でも最近の色恋に夢中なようでして。ますます練習に身が入らなくなってるような」

「そ、そうか。それは………ご愁傷様」

「……はい」

嘆息交じりに答えた俺の姿がよほど哀れだったのか、平野元部長――部長でいいか――はふむと顎に手を当てて何事かを思案すると、それから笑顔を浮かべた。

「それじゃ、久しぶりに僕と勝負しないか？」

「え、いいんすか！」

「ああ。僕としても今の部長が腑抜けていないか確かめたいしね」

「よっしゃ！ やりますやります！」

即行で自分のラケットを取ってくると橘先輩に場所を譲ってもらう。橘先輩はそれから部長の数メートル後ろで立ち止まると目付きを真面目なものにする。どうやら部長のコーチ役らしい。

新旧部長対決だッ………！ とわらわら集まりだした後輩たちに少し気恥ずかしさも受けながら、俺は構える。

部長は卓球場の時計を見た。

「もう八時か。あと三十分しかないから、二セット先取な」

「了解っす」

確かに着替える時間も考えると、始業の八時半に間に合わせるにはそれが妥当だ。つまり短期決戦。

先に波に乗った方が勝つ。

じゃんけんをして勝った俺はサーブ権をゲットし、それから第一セットが始まった。

第三話

「……………つえー。はは、やっぱりつええ」

結果から言えば、第一セットは11対9で俺が落とした。終盤に犯したサーブミスは自分のミスながら間抜けだったな。完全に空振りした。

向かいでは部長と橘先輩が身振り手振りを交えて真剣に話している。向こうの表情に余裕が無いのがせめてもの救いか。

タオルで汗を拭きながら、部長の強烈なドライブにどう対処しようかと俯き加減で考えていると、話しかけてくる声があった。

「どんまいどんまいっ！ まだまだ行けるよ！」

女子卓球部部長の姫宮愛だった。橘先輩と同じように俺の背後に控えていてくれたということは、どうやら俺のアドバイザーになってくれるらしい。

少しだけ脱色したセミロングの髪が包んでいるのは小さな頭、それに対してパツチリとした瞳は大きく愛くるしい雰囲気を持っている。これは室内競技選手に総じて言えることだが日に当たらないので肌は白く、しかしそれだけで女子は美人に見えたりするから不思議なもんだ。あと、コイツも俺や加藤と同じクラス。

姫宮も部長なだけあって二年の女子の中では一番強い。しかしこちらは男子とは違って強さがほぼ一線な選手が揃う群雄割拠な激戦地なのでその点男子より活気がある。さっきの相川もトップ集団に含まれた一人だ。

「ブランクがあるから当然だけど、やっぱり平野先輩はフットワークが鈍ってるよ。もっと左右に揺さぶっていけば大丈夫じゃないかな」

そちらに置いてあった俺のスポーツドリンクを手渡してくれながら、

「それと、マツケン君のブロックの出が遅い気がする。先輩のドラ

イブは強い分テイクバックが大きいんだから、それが見えたらすぐブロックするか下がるかしないと」

……なんて的確なアドバイス。さすが関東大会にも出たことのあるヤツは違うな。ちなみにマツケン君とは姫宮が俺を呼ぶ時のあだ名だ。どうしてそんなニツクネームが付いたのかと言うと俺が松本健二という名前だからで、決してサンバ好きだからではない。それに、こんな呼び方コイツしかしてこない。きっと皆、そのセンスの無さに気付いているのだろう。言っている本人以外。

「……………了解しました」

「うんっ、がんばっ！」

ドリンクとタオルを受け取ると、姫宮は俺の背中をバンツと押してくる。つんのめるように前を向けば向こうからも部長が歩いてくるところだった。

これから第二セット。俺にはもう後がない。

「負けた——！」

「でも、いい勝負だったよ」

体育館に八つ当たりするようにボディプレスをかまし、そのままひっくり返って大の字になる。その俺にタオルとドリンクを渡してくれるのは笑顔の姫宮だ。

そう、第二セットはいい勝負だったのだ。

はじめは俺が優勢だった。一時は四ポイント差を付けたりもしたのだ。しかしそこからの部長の巻き返しが凄まじかった。俺の攻撃はことごとく跳ね返され、向こうの攻撃にはことごとくふっ飛ばされた。そうして気付いたら10対9で先輩のマツチポイント。

でも、いい勝負だったのはそこからだ。姫宮のアドバイスをもう一度思い出し、見ていた一年生たちから歓声が沸き起るほどのデュースデュースの繰り返し。やがて先輩の勝利と言う形で試合が終わった時のスコアは24対22となっていた。そりゃ身体が疲れて

るわけだ。

「お疲れさま、松本。僕も久しぶりに本気で試合が出来た。これなら当分、男子卓球部は安泰だな」

「はは、そりゃどうも」

そつえば試合後の握手を忘れていたことに先輩から差し出された手で気付いた。俺はその手に握手を返し、そのついでに起き上がる手助けもしてもらう。

横にやって来た橘先輩も声を掛けてくる。

「いや、本当に。お前はまだ二年なのにそれだけ強いんだ。もしかしたら最後の大会の時には平野の成績を超えられるかもな」

そんなこと言いつつ部長が勝ってニヤニヤと嬉しそうじゃないっすか、とは口には出さない。これは橘先輩なりの饒の言葉だと理解しておく。

部長は続いて俺の隣でニコニコしている姫宮に視線を移した。

「姫宮も女子部部长として頑張ってくれ。あと、松本が腑抜けたりしたら姫宮がしっかり立ち直らせてやるんだぞ」

「はいっ！ もちろんです！」

もちろんなのか。部長の饒は随分と刺激的だな。

「ともかく、二人とも。卓球部を頼んだぞ」

「……はいっす」「はいっ！」

テンシヨンの正反対な返答に苦笑した先輩はそれから俺たちに頼り甲斐のありそうな背を向けると、前へと歩いていく。その将来へ迷うことなく向かっていくような堂々とした足取りは何故か俺たちの瞳を感涙で滲ませた。一年生たちからも拍手が沸き起こる。

割れんばかりのカーテンコールに感極まったのか立ち止まって振り返り、満面の笑みで部員たちを見回した部長は、最後にこんな感動的な締め言葉を残してくれた。

「何やってるんだ皆、もうすぐチャイム鳴るぞ」

時計の針は八時二十三分を指していた。

——着替えに手間取った部員数名は担任から問答無用で遅刻の烙印を押されたらしい。

第四話

放課後、練習のために同じクラスの姫宮と再び卓球場に赴いた俺。加藤は用事があるとか部長である俺にパパツと言つて、さつさと帰つてしまつている。顔の緩み具合からしてどうせ相川とのデートだろうと睨んでいた俺なのだが、その相川がちゃんと部活に来ているところを見ると勘は外れたらしい。

着替えを済ませ、部員を集めて号令すると全員で拭き掃除を終わらせる。それからペアを組んで卓球台をセッティングしていく。いつもペアを組んでいた加藤がいないということとで他にも独り身がないかと探そうと思つたのだが、同学年の男子は皆ペアを既に組んでしまつており、どうやら本格的に俺は余り物みたいだ。

「……しゃーない」

ネットでも出して今朝空振つたサーブの練習でもするか——と用具庫へ向かったところで、どうした事か同じくペアがいないらしい姫宮が友人と話しながら顔を茹で上げられたロブスターみたいに真っ赤になつていた。

これは占めた。俺はそちらに寄つて行く。

「なあ姫宮。もしかしてお前も相手いなかったりする？」

「えっ！？ ……う、うん。いない」

ん？ いつもみたいに歯切れが良くないな。お前のキャラであるあのスタッカート気味の言葉遣いはどこに行った。しかも話し掛けた瞬間ビクウ！ と肩が吊り上つてたし。

ともあれ、やっぱり相手はいないみたいだ。

「だったら俺の相手してくんない？ 丁度今朝の部長との試合の反省点もあるし、見てたお前が相手だと助かるんだけど」

「う、うんっ。わかつた」

たどたどしいながらも頷いてくれたので一先ずはオーケーらしい。含み笑いを漏らす友人たちに向かって頬に紅葉を散らしながら叩く

真似をする姫宮だが、一体何の話をしてるんだか。乙女の会話するのは男子禁制らしいから訊きはしないけど。

男子と女子の丁度真ん中あたりの台が空いていたので、そこを使わせてもらうことにする。もしかしたら後輩が出した台かもしれないが、ウチの卓球部には先輩の不当占拠に黙っている穏当な部員はいない。もし使う台なら誰かが言ってくるだろう。その時になったら明け渡せばいい。

しばらくしてダルそうな顧問、高橋女史がやってきた。しかし教える気など皆無で、すぐさま折りたたみ椅子を出してくるとそこに腰掛けて舟を漕ぎ始めた。マジで何しに来たんだ、この顧問。卓球部の顧問でありながら卓球経験があるのかも不明だし。

「……はあ」

アレを意識に上らせても時間の無駄だな。さっさと練習始めよう。

「そんじゃま、よろしく」

「ふ、不束者ですが、よろしくお願いしますっ！」

……そんな場違いっぽい言葉を聞いたときから変だとは思っていたが、やはり姫宮の動きにはいつものようなキレが無かった。

練習開始から二十分が経過。

現在、体育座りの姫宮は頭からタオルを被って絶賛うな垂れ中だった。

俺もドリンクを手に取りつつその隣に腰を下ろすと、姫宮はビクツと肩を震わせた。俺は何か嫌われるような事しただろうか。

「どうしたんだ、姫宮？　なんか様子おかしいけど」

「そー」

そ？

「そうかな!？」

どう見てもそうだろう。

「なあ、俺何かしたか？　だとしたら言ってくれ。謝った上で反省して二度と繰り返さないように努力するから」

「ちー!」

ち？

「違うの！ マツケン君は何にも悪くないのつ。ただ私がダメダメなだけで……」

「悩み事か？ だったら相談のるぞ。まあ男に話せるような事ならだけど」

姫宮はそこで、ガバツ！ と頭を上げて被っていたタオルをふっ飛ばすと、俺と目を合わせてきた。

「っ……………」

心なしか潤んで見える瞳で真摯に俺の目を覗き込んでいるがしかし、言葉は発しない。

しばらく続いた沈黙。すぐさま居たたまれない心地になった俺が沈黙に痺れを切らして逆に声をかけようとしたところで、それを封じるかのようなタイミングで姫宮はようやっと口を開いた。

「マツケン君！」

「……………はい？」

「あ、あのね。そのね。よかったら今度の日よ——」

「おーい！ 姫宮あ！」

意を決したように表情を引き締めて口を開いた姫宮だが、その覚悟は十秒持たずに水泡と帰した。なぜなら、あの駄目顧問の無駄にデカイ叫声が姫宮の言葉を遮ったからだ。

高橋女史の方を向いているのは憎々しげに睨んでいるからだろうが、頬を膨らませている横顔は微笑ましいだけで、とてもじゃないが脅しになどなりそうにない。無論、能天気な顧問にも通用するわけはなかった。

「姫宮あ！ 早く来ーい！ 早くしないとお前のスリーサイズばらすぞー」

バビューンツ！ とF1マシンの如く駆け出していったのは一瞬の出来事。なぜアンタがそれを知っている。でも、本当に知っているもおかしくない雰囲気怖い。

ともあれ、姫宮が高橋に呼ばれてしまったためにまたもや独り身

になってしまった。

ま、あの顧問の話だからそう時間も掛からないだろう。姫宮がすぐに戻ってきてくれると予想した俺は、もう一口ドリンクを飲むと一人サーブ練習を始めようと立ち上がった。

遠くから「あ、ちよつと！」だの「待っててばっ」だの姫宮のテンパった声が近づいてくるが気にせず……………ん？ 近づいてくる？

どういうこつちやとそちらに目を移せば、姫宮以外にもう一人の少女がいて、そいつが俺に向かって歩いてきていた。その長い黒髪、憎たらしくも幸せそうな笑顔。

どこかで見覚えがある……………って！

「昨日のコスモス女あ！」

「あら、私いつの間にそんな秋を代表するお花になったのかしら。褒め言葉？」

そつちではなくて、宇宙の方だ。もちろん褒め言葉ではない。それに昨日の言動はコスモスというよりむしろカオスだったな。

俺の内心の悪態などは気にも留めず、少女は折り畳み傘の下で見せた魅力的な笑顔そのままにニコニコしている。

それから紺色の筒みたいなのが投げられた。

「うお……………」

対神様の気まぐれ用折り畳み傘だった。

「昨日はありがとうね。お陰様で濡れなかったわ」

「俺はお陰様でびしょ濡れだったつーの」

「あら、それはご愁傷様」

やっぱり喧嘩売ってるんだろうか。

「あ、あのマツケン君。この人知り合い？」

「恩を仇で返された関係を知り合いというんなら、まあ知り合いだ」

「あら、酷いわね。貸してくれたのあなたじゃない」

「貸すなんて一言も言っていないだろうが。俺は『入っていくか』って訊いたんだ」

「初対面の女の子に相合傘を迫るのはどうかと思うわ」

「うぐっ……」

思い返してみれば、確かにそれはないかもしれない。やはりあの時は神様に反抗して気分が良くなっていたため通常の思考回路すら働かなくなっていたらしいと自己弁護。

姫宮からの視線も痛く、ばつの悪くなった俺は話題を換えた。

「それより、よく俺が卓球部だって分かったな。昨日は特にそれと分かるもの持ってなかったはずだけど」

「どこかで見たことあるとは思っていたのよね。それで家に帰ってから考えてみて、全校集会とかでよく晒し者になってる人だっと思っ出したのよ」

表彰されてるのに晒し者かよ。……まあ似たようなもんだけど。

「はあ、まあいいや。傘も返してもらったし。要件はそれだけだろ？ そんじゃ姫宮、練習戻ろうぜ」

「あ、あの、それがね……」

姫宮は気まずそうにコスモス女を見ている。

「ん？ なんだよ、まだ何かあるのか？」

「ええ、私ね」

相変わらずニコニコしながら、

「卓球部に入ることにしたから」

こう言った。

かーん、という音を立ててラケットが板張りの床に落ちる。そして俺はぼかーん、と大口を開けてコスモス女を見つめる。

「……な、なんで？」

「入部するのに特別な理由が要るの？」

要らないよな、悔しいことに。しょうがない、この質問は取り下げよう。

「でもこんな中途半端な時期に入部って、お前、卓球の経験あるの？」

「——お前」

コスモスは目を眇めてきた。

「その、お前、ってゆうの止めてくれる？」

「は？ と首を捻る暇すら与えられなかった。」

「私は2年A組の弓削美月。あなたは？」

弓削。珍しい苗字だな。しかも同学年。

「お、俺はE組の松本健二だけど……」

「そう。じゃあ、もう名前教えたんだから私のことは名前で呼びなさい」

「は、はいっ。……じゃ、じゃあ弓削、さん」

言葉の圧力に押されながらも話を軌道修正させようとする俺の心意気は、弓削さんが踏み込んできた大股の一步で大時化の日の砂浜に建造された牙城の如く簡単に崩れ去った。

下からぐいつと俺に顔を近づけると、妖しい笑顔で睨めつけてくる。

「な・ま・え・で、呼びなさい」

「は？」

これは一体何を求められている？ 名前。俺は今名前で呼んだよな。そののどこがいけなかった。

いや、誤魔化すのは止めにしよう。つまるところ苗字ではなくファーストネームで呼べという事だろう。いきなり相合傘を迫るのはどうだのと言っておきながら自分は下の名前で呼ぶ事を強要するのか。どっちもどっちだろう。

まあ俺は今朝がた下の名前で呼び合う高校生カップルを目にしているし、今どきはこっちの方が高校生として正常なのだ。でも、だからといって問題ないのか？

あ、本人から言われてるんだから問題ないのか。

「じゃあ、美月さん」

案外口に出すのは余裕だったな。これで俺も正常な高校生男子の仲間入りか。

「卓球の経験あんの？」

「さんもいらなんだけど……まあいいわ。で、卓球の経験？」
胸を張りやがった。この自信ありげな態度は――

「全くないわ」

「ず――！ と勢いをつけて倒れながら滑り込んだ。やって
みたかったんだ、このボケ。白い体操着がモップ代わりとなって先
ほどの掃除で拭き切れなかったゴミを付着させているが構いやしな
い。満足だ。」

「特に部活も入ってないし、せつかく来たんだから入ってみようか
と思ったの」

再びパイプ椅子に座って腕を組み、こくこく一定間隔で首を前後
に揺らしている顧問をチラッと横目に見る。

「まあウチは確かに緩い部活だから問題はないんだが――って、
コイツの性別は何だ。」

「何で男子の俺が仕切ってたんだ。女子卓球部の部長はその姫宮だ
から、ソイツに言え」

この際顧問はどうでもいい。

それから姫宮に話を向け――ようとしたところ、

「あ、あれ？」

姫宮の姿が忽然と消えていた。卓球場の中を見渡してみても見当
たらな。一体どこ行っただ。

「愛なら全速力で走ってどっか行っちゃったわよ」

俺の心の疑問を読んだらしいサイコメトラーの声が聞こえ、そち
らを向いてみると相川がラケットをくるくる回しながら立っていた。
左手を腰に当てて胡乱な目で美月さんを見ながら、

「入部に関しては別にいいんじゃない。今からだってやっていけば
最後の大会までにはそこそこ行けるでしょ。まあ当然彼女の運動神
経にもよるだろうけど」

それもそうか。

「入部届けとかは今じゃなくてもいいし。それで……美月、今体操服ある？」

相川も早速名前と呼ぶことにしたらしい。

「ええ」

「それじゃ、その更衣室で着替えてきて。センスがどんなものか、あたしが見てみるから」

そんなことをお前がやるのか。

「……できるのか？」

「馬鹿にしないでよ。あたしは実質、愛と実力そんなに変わらないんだから。ランキング戦の時に限って毎回負けるだけで」

いや、それは歴とした実力差じゃないのか？——なんて、鋭く目を細めている相川にはとてもじゃないが言えなかった。

第五話

着替えてきたコスモス（美月さんのこと。心の中ではこれで呼ぶ決めた）と相川が端っこの台を占領し始めてから十分が経過。三度相方のいなくなった俺は一人寂しくサーブの練習をしている。相手コート of 絶妙な位置にバウンドし、そのまま台上でツーバウンドしたボールはきゆるきゆる回転しており、やがて転がって床に落ちた。世界にだって通用しそうだと思画自賛した最高のサーブだったんだが、誰も見ちゃいない。

……俺、部長なのにな。もしかしたら子供に構ってもらえない父親というのはこんな気持ちなのかもしれない。頑張りましょう、お互い。

世の父君様たちに勝手なシンパシーを感じていたところで、やっとさ姫宮が戻ってきた。タオルで顔をゴシゴシ拭きまくりながら、やがて俺の傍まで近づいてきたが、その尋常じゃない拭きっぷりに俺はたじろぐ。

「ど、どした？」

ぴたつと動作が止まり、それからゆっくりとタオルを持った手を下ろしていく。段々と晒されていく姫宮の顔。その露になった顔面のあまりの悍しさに俺は……！

なんてこともなく、普通に姫宮の顔だった。唇をへ字にひん曲げてはいたが。

「

……………」

姫宮は無言。ひたすら無言。そして心なしか赤いような気をする目で俺を睨んできた。花粉症か？ この時期だとブタクサが最有力候補っぽいが、なるほど。それで顔を洗いに行ってたのか。

納得した俺は一度手を打つと、もう一回訊く。

「どした？」

「……なんだか今、物凄く不本意な解釈された気がする……」
お前もサイコメトラーだったのか。

それから姫宮は降参といったふうに肩を落として嘆息した。
「はぁ、まあいいや。ついでに入部届けも持ってきたから……..
って、弓削さん、どこにいるの？」

「今は相川がセンスを見るとか言って相手してる」
「そうなんだ」

「それと、どうも弓削美月は下の名前で呼ばれる事を所望らしい」
相川にファーストネームと呼ばれて満足そうにしていたコスモスの顔を思い出し、姫宮にも助言しておく。あの一步を踏み込まれるプレッシャーの餌食になるのは俺だけで十分だ。

「……ふーん。そうなんだ」

一瞬の沈黙を挟んで姫宮が頷く。そして場内を見回し、隅っこの台の側で話している二人の元へと向かっていった。

その足取りが、さっき戻ってきた時より軽く見たのは俺の気のせいかな？

やがて戻ってきた姫宮は動きもしなやかになっており、その後は俺も集中して今朝の反省点を踏まえた練習をすることができた。時計を見てみると時刻は六時三十分。そろそろ締める時間だな。自分の練習もせずに最後まで付き合ってくれた姫宮に礼を言っと、二人で卓球場の中心辺りに向かい、俺はそこで手を叩いた。

「本日の練習終了——！」

同時に部員は揃って台の片付けを始める。もちろん俺と姫宮も使った台を用具庫に戻す作業に移る。そういえば、この台は誰が出したんだろうな。結局誰も名乗り出てこなかったが。

ここは卓球場なのだからいちいち台を片す必要はないんじゃないかという後輩がいるが、そういうわけにもいかない。卓球部がここを占有する事を快く思わない体育教師が、雨の日に外で体育の授業

が行えない場合ここを使わせると申請してきて、あのおたん顧問がすっかり了承してしまったのだ。何せ縦五十メートル横三十メートルはある板張りの空間は使い勝手がいいからな。今ではしょうがないかとも理解している。

部活動開始前のまっさらな状態に戻り木目が目に優しい広間の真ん中で、俺と姫宮を中心に部員たちが円を作る。

「おつかれさん。この部のモットーは皆で考え皆で直す。今日も、ちゃんと仲良く練習したか？」

パイプ椅子を片して早く帰ったそうにドアの前でうずうずしている顧問は見ないようにしていたのだが『無駄話してないでさっさと締める』的なプレッシャーがそちらから漂ってきたので、なにかもう色々諦めた。

「もうすぐランキング戦だからね。女子も男子も気合入れてこっ」

姫宮が俺の言葉を継いだ。

「それじゃ、明日も練習来てくれるかな？」

またやるのか、それ。

『いいとも——！』

やけっぱちにも見える感じで姫宮の望む返答を律儀に返す部員たち。そうだな、分かってるんだな、姫宮のセンスが悪いこと。それでも付き合ってやる部員たちの優しさに姫宮は未だ気付いていない。ただただ満ち足りた笑顔でうんうん頷いている。

コイツが女子部の部長になって初めての締め挨拶の時、ほんと唐突にこのフリをしてきた。最初はポカンとしていた部員たちだったが、姫宮の泣きそうな顔を見て咄嗟に所望の答えを返すと、それ以来、味を占めてしまったのか姫宮は毎日続けている。部の伝統にでもするつもりなのか。

部員たちの優しさに甘えてないで、そろそろ望まれていないことに気付いてくれ。

ともかく現在の卓球部ではそれが解散の合図となっているので、部員たちは散り散りになり、それぞれ更衣室へと入っていった。も

ちろんのこと既に顧問の姿はない。また俺が職員室に鍵を返しに行くことになりそうだ。もう慣れたけどさ。

窓の鍵がかかっているかどうかをチェックすると俺も着替える。さいならー、と挨拶してくる後輩たちを見送りつつ同学年の友人たちも全員が退出した事を確認。電気を消し、戸締りをすれば部長の仕事は完了。

それにしても、ここから職員室まで行くのダルいなー。あのアホ顧問、どうせ職員室戻るんだから少し待って鍵持っつてくれりやいいのに。

嘆息を吐きつつ諦観し一階へ降りるため階段に目を向けると、そこにはてつきり帰ったものだと思っていた姫宮が立っていた。

「今日もお勤めご苦労様です」

小さく会釈しながらのセリフは薄暗い廊下の雰囲気に合わせてか少しだけしつとりしている。

「なんだ、まだ帰ってなかったのか」

「うん、美月ちゃんの入部届け、高橋先生に渡すの忘れちゃって。マツケン君も職員室行くだろうから、待ってたの」

「ありや、そうなのか。なんか悪いな」

「ううん、大丈夫。そんなには待ってないから」

それから並んで階段を降りる。

体育館から職員室のある普通校舎まではコンクリートの渡り廊下で繋がっている。クリーム色の月の光に照らされたコンクリート。なんとも不気味だ。傍に生えてる樹木が照らされていると味があるように感じるのにな。どうも月明かりは無機物とは相性が悪いらしい。

ほとんどの生徒が帰ってしまっているのか辺りに人の気配はない。俺たちが歩を進める度にパンパンという硬質な音が立ち、それが無情に冴え冴えとした空気へと溶けていく。

いつも歩いていたはずなのに今日はやけに冷たい印象を受ける。それは多分、俺の隣を歩いている人がいるからだな。その温かさが

あるから周囲の冷たさが目立つんだろう。

「もう夏も終わりだね」

姫宮もそれを感じたのか、ぼんやりした月を見上げながら俺に話しかけてきた。

「ああ、そうだな」

俺もそれに倣った。

「夏の大会は惜しかったね。もうちょっとで関東行けたのに」
「お互いな」

七月にあった大会では俺も姫宮も県大会の三回戦で破れてしまった。俺にとっては最高記録だが、中学時代に関東大会に出たこともある姫宮にしてみれば悔いの残る大会ではなかったか。

「私ね」

姫宮は月を見上げたまま、

「中学時代はちよつと寂しかったんだ。県大会とかに出ても私一人だね、顧問が男の先生だったんだけど、凄いスパルタの人で。他に指導に付いて行ける人もいなかったから私に付きっ切り。そのせいで同じ部の友達なんてほとんどできなかったの。拳句の果てにその先生とデキてるとかって噂が立ったりもして、ほんと、卓球止めちゃおうかと思った」

「……お、おう」

いきなりヘビーな話を始めたな。この雰囲気の影響か。

「それでも最後までやった。卓球が好きだったから。そのお陰でつてゆつか卓球の推薦の話もあつたんだけど、全部断った。中学までの卓球はそこで終わりにしたかったから」

自分の中でも吟味するように淡々と言葉を紡ぐ。有機生命体である人間の目には優しく映る月明かり。その光を受け止めながらの口調は穏やかだ。

「そこでの成果の推薦なんて真っ平ごめん。普通に受験して、この高校に入ったの。そしたらね……」

月から目を外し、次いで俺の方を向いた。それを気配で察知し俺

も同じようにする。

そこにあつたのは、姫宮のさっぱりした笑顔だった。

「正解だった。私にとって最高の」

この無機物に包囲されたような渡り廊下の中、はつきりと浮き立つ瑞々しい笑顔で俺を見つめる。

俺の胸の辺りから発生しているこの騒音は何だ。辺りが静かなせいもあつて外にまで聞こえてしまいそうだが、それは勘弁願いたい。「ここの卓球部は皆楽しそうで、でもそれはサボってるんじゃないくて、楽しく卓球を練習してたんだよ。私が中学時代にできなかったことも、ここでならできるんじゃないかな、って思ってたんだ。強い人がいっぱいいて、でも仲良くてね」

まあ、ウチらの代は女子のツワモノ多いからな。

「それだけじゃない。顧問の高橋先生はのんびりしてるけど、誰もその雰囲気嫌ってない。きつと高橋先生があんなだから、今の卓球部があるんだよね」

ここにアホ顧問肯定派がいたか。しかもソイツは女子部部长。俺も強く出れなくなってしまったではないか。

「でも、私にとって一番大きいのはあ……………」

……………なぜ、そこでもつたいぶる。

姫宮はそこで小走りに数歩前に行くと仄明りの中でスカートを翻しながら振り返った。

そしてはにかむのはどういう意味だ。

「マツケン君に会えた事かもっ」

「……………」

……………これは、アレか？ 一種のアレなのか？ 自惚れてもいいのか！ だとしたら俺はどう答えればいい！ いやいや、冷静になれ俺。よく考えて返答しなかったら相手に失礼になるぞ。それくらいはおばこ息子の俺でも知ってる。

だが姫宮は答える時間も、考える時間すらも与えてはくれなかった。次の瞬間には真剣な面持ちで、俺の目を惹きつけてきたから。

「ランキング戦。私、絶対勝つからね。また一緒に部長やろうね」
その言葉を噛み締める。今度は俺から見つめ返した。

「……そうだな」

止まっていた足を再び動かして、もう一度姫宮に並ぶ。並んで歩みを再開する。

これまで何度も並んで歩いたことはあったのに、今はかなりこそばゆかった。

第六話

哺乳類は生物の中でも学習をする。人が世の中のことを一般常識として覚えていく学習は言わずもがな、ネズミだって何度も迷路を彷徨わせていけば、そのうち一目散に餌へと在り付くことができるようになるのだ。しかし、学習の質と言うものはやはりホモ・サピエンスに一日の長があるだろう。ホモ・ファールだろうがホモ・ルーデンスだろうがホモ・ロクエンスだろうが、言ってしまうえば全てそれに集約されると俺は考えている。

……んな持論はどうでもいいな。

何が言いたいかというと、人間は学習の質が高いということ。しかし、それを遥かに凌駕する学習を行える人間がいるとしたら、ソイツは何と称されるのだろうか。

バコーンッ！ と、相川のコートに強烈なスマッシュが叩き込まれた。相川が呆然としているのはスマッシュの予想外に速かったからではない。いや、それもあるだろうが何より自分が反応すらできなかったことに驚いているのだ。

無理もない。どうしてって？ そのスマッシュを打ったのが、

「ふう、こんなものかしら？」

コスモスだったからだ。

見回してみれば、観戦していた全ての人がドン引きしている。かく言う俺もその一人。

「あら？ どうしたの、奈津子？」

長い髪を頭の上の方で折りたたむようにしてピンで留めたコスモスは、モンシロチョウの幼虫からハチが出てきたのを発見したような怪訝な目で相川を見ている。これはある種の自慢なのかそれとも天然なのか。

でもどちらにしたって俺たちに非難する権利はない。だって本気で凄いのだから。

コスモスが卓球を始めたのは昨日。真偽の程はさて置いて、訊いたところによると卓球のラケットを持ったのも昨日が初めてだそう
だ。

ただ今の時刻は朝の七時四十分。つまり始めてまだ十二時間ちょっとしか経ってない人間が、高校入学時から始めてそこそこ強くなった人間に反応できないようなスマツシュを打ったのだ。模範みたいな綺麗なフォームで。そりゃ引くだろう。

「……………美月。あたし、スマツシュの打ち方とか教えた覚え、ないんだけど」

「？ ええ、教わってないけど」

「じゃあ、どうして打てるの？」

「？ 他の人の打ち方見てれば分かるでしょ。打ち方くらい」

あ、相川が崩れ落ちた。人類の進化形の学習能力の前に。

「本当にどうしたの？」

相川は言葉を発せられる心理状態ではないようなので俺が代わりに答えてやる。

「きっと人間の新たな可能性に感動してるんだ」

「？ どういう意味？」

自覚はないらしい。

「そういう意味だ」

言外に詮索してくれるなと空気で伝え、俺は練習していた台へと戻る。コスモスはそういう人間なのだと無理矢理理解すればいい。相川もそのうち復活するだろうさ。というわけで、そちらの騒ぎからは手を引く。

俺には他にも頭痛の種があるからな。

「んで、お前は何でそんなに機嫌悪いんだよ」

そう、相方の加藤がどうにも不機嫌で練習に身が入っていないのだ。

「ウツセー、お前にや関係ねーだろ」

「関係ある。練習相手がそれじゃ困るだろうが」

「お前、俺以外に友達いねーのかよ。ウツザ」

……俺に八つ当たりするほどキレてるのはよく分かった。しかし、今のは俺以外の部員まで不快にしているという事実を知れ。

サイコメトラーではない俺の心の声など届くはずもなく、加藤はラケットを己の荷物の山に放り出すと、それを持って更衣室へと引っ込んでしまった。どうも練習に戻ってくる気はないようだ。

「どうしたの、加藤君？」

見兼ねたらしい姫宮が寄って来た。昨日の夜に聞いた言葉もあるし、コイツは部の空気が壊れることは防ぎたいんだろう。

それでも俺には思い当たる節がない。

「さあ、俺もよく分からん」

昨日、部活を休んだことと関係あるのかとは思ったが、そんなこの場にいる誰もが承知しているだろう。

ならば、俺たちが持ち合わせていない情報を持っている可能性があるのは、ただ一人。四つん這いでうな垂れているところ悪いがな。姫宮がその一人の傍に寄る。

「ねえねえ奈津子ちゃん」

「……………なによ」

微かな返事はかろうじてあった。が、

「加藤君と何かあったの？」

この疑問には、

「っ……………」

ぴくつと反応しただけで、言葉を返してくることはしなかった。触れるなオーラを敏感に察知した姫宮は身を翻すと戻ってくる。

「本当にどうしたんだろう……………」

「さあ、な」

まあ二人の間でなんかあったのは確かみたいだけど。それ以上のことは二人のどちらかが語らない限り明らかにやらんだろ。変な風になった空気を元に戻すために俺は声を張り上げる。

「あい皆練習戻れ——！ まだまだ時間はあるぞ——」

首を捻りながらも皆は練習を再開する。卓球部において、こんな沈んだ雰囲気なんて誰も望んじやいないのだ。

んでもって練習相手のいなくなった俺はどうすりやいいんだろうな。空いている人がいないかと卓球場を見渡してみたが、残念ながらシングルは俺一人の様子。昨日相手してくれた姫宮も今日は相方を確保して華麗なドライブ合戦を演じている。こりやまたサーブ練習かね。

……いや、一人いるな。

コスモスだ。相川はそつとしておくとして、そうなった場合コスモスが空く。あのスマッシュなら俺のブロックの練習にもなりそうだし、基本動作を教えつつ自分自身も確認するとかプロっぽいことを自己満足でやってしまってもいい。

そうと決まれば膳は急げ。

「なあコス……じゃなかった美月さん。俺が相手するぞ。相川はまだ復活するまで時間掛かるみたいだし」

言っと、相川は這って台の横へと移動した。どうやら俺に場所を譲ってくれたらしい。

「そういうわけだ」

「別にいいけど。それで健二」

「……！」

……もしかして俺は今ファーストネームで呼ばれたか？ 家族以外から初めて言われたぞ。それにしてもなんだ、この身の毛立つような感覚は！

「？ どうしたの？」

「な、なんでもない」

動揺が顔に出ていないことを信じよう。

「ふーん、まあいいわ。健二。私、あの愛が打ってるアレやりたいんだけど」

コスモスが指差すのは姫宮の台。そこで姫宮が打っているものいえば、

「……ドライブか」

「そう、そのドライブっていうの。打ち方から見て上回転をかければいいんでしょ？」

「……仰る通り」

教えることないじゃん。さすがは新人類の洞察力。この分なら、さっきのスマッシュと同様、見ている俺たちの度肝を抜いてくれそうだ。

「そんじゃま、とりあえず打ってみ」

「分かったわ」

俺は軽い気持ちでコスモスのコートに打ち頃ボールを出してやり

「……！」

——己の脇を抜けていく高速の物体を目にする事となった。

第七話

朝練が終わり、学生の本分である勉強に勤しむために教室へと戻った卓球部の面々。同じクラスの俺と姫宮も所属する2年E組の教室へと戻ってきた。先に戻っていた加藤は誰ともつるむことなく自分の席でぶー垂れているので触れることはしない。俺だって腹を立てなかったわけじゃないからな。

ちよつとした反論の意味も込めて、話しかけてきたクラスメイトの進藤との会話を聞こえよがしにしてやった。まあ、すぐに意地悪かったと自分に苦笑して止めたけども。人間関係、上手くやっていけないとな。

担任の佐々木氏が引き戸を開けて教室に入ってきた。これより朝のホームルーム。

クラス委員の「きりーっ」の号令にも従わない加藤は頬杖を突いたまま。幸いにも前で立ち上がった長身の生徒に隠れて佐々木氏に見咎められることはなかったが、見ていた生徒としていい気はしない。そこまで反抗的になる事もないだろうに。

事務連絡を済ませて佐々木氏が教室から退出すると一時間目開始まで束の間の休憩時間に入る。すると加藤は席を立ち、しかめっ面で教室を出て行った。席に座ったままの俺と姫宮は顔を見合わせて、しかし追いかけるようなことはしなかった。

再び寄ってきた進藤と談笑を開始する。話題は昨日の野球の試合。お互い覇気のチームが同じと言う事で入学当初から話す機会も多かった。百八十センチ以上の屈強な体躯に小麦色の肌。短く刈り込んだ坊主頭は正にスポコンの証。典型的な野球部員だ。二年生ながらサードの低位置を奪取しているらしい。

常に細められている穏やかな目元は男女問わずに好評で、性格も同様に温和なのもあり仏なんてピッタリなあだ名が付いている。野球部のマネージャーと付き合っているという事実は隠しているらし

いが誰から見てもバレバレなのは指摘しないで置いてやろう。

昨日のあのシーンでの采配はどうだったのだ、あのピッチャーの変化球のキレがどうだったのだ、やはり熱の入りが違う仏の解説に苦笑しながら付き相槌を打ってやる。

と、その時。

きゃああああ！ という女子の悲鳴が廊下から響いてきた。

廊下側にいた生徒たちが顔を出して様子を窺う。それから俄かにざわめきだした。

なんだか嫌な予感のした俺も廊下へ飛び出した。後ろから進藤も付いてくる。慈悲深い仏は面倒ごとにも自ら首を突っ込んでいくのだ。男にとつても、その安心感は健在。

しかし、そこで繰り広げられていた惨状には仏も顔を顰めざるを得なかったらしい。

廊下の先で、男子が女子を殴り倒していた。完全に握りこぶしで。そして、俺の嫌な予感ハ的中。

——張り倒された相川に、張り倒した加藤。それが惨劇の構図だった。

でも、きつとそれだけでは終わらない。この事件は波紋を広げていくはずだ。共に同じ卓球部だが、どう言い換えたところで卓球部員が暴力沙汰を起こしたのだ。この学校も力を入れてくれている卓球部が不祥事を起こしたのだから、下手したら今後の大会への参加を止められることになるかもしれない。

そう思うと、俺には立ち止まっている事なんて出来なかった。全速力で加藤の背後に肉薄し、倒れた相川へ上げた足を振り下ろそうとする最悪の行為は間一髪で差し止めることに成功する。しかし、周囲には野次馬の同級生たち。もう言い逃れはできない。

「止める馬鹿！」

羽交締めた俺の腕から逃れるように暴れる加藤を、進藤も押さえ

つけるのを手伝ってくれる。その顔は破戒無慙な教徒を見る阿弥陀如来のように悲しそうに崩されていた。

相川の所属するC組の女子が相川に駆け寄っていくと、ハンカチを取り出して口元を押さえてあげている。それから憎々しげに加藤を睨みつけた。

それすらも目に入らない様子で荒い息を吐いている加藤は、

「ふざけんなよ！」

女子に向かって、いや、付き合っているはずの彼女に向かって口角沫を飛ばしながら怒声を張り上げた。

「お前、何なんだよ！」

もう一度足を振り上げたので俺は強引に加藤の身体を一步下からせる。しかし、加藤の怒りは冷めやらない。

「そんなに卓球が大事かよ！」

その言葉には、俺も怒りを覚えた。どうしてそんな口論になっているのかは知らんが、コイツは卓球部で活動してる全ての生徒を侮辱した。卓球が上手くなりたくて一生懸命汗水たらして練習してる全ての部員を馬鹿にした。

これはもう黙っていられない。俺も一言――

「大事よ！」

――言おうとしたのに、それ以外の叫声に妨害されてしまった。

相川だった。クラスメイトに助け起こされながら、

「今のあたしにとって何より大事よ、卓球が！ あんたなんかよりずっと！」

取り巻いていた女子たちから拍手が沸き起こる。それに後押しされたように相川は険を増した目つきで加藤を見据えた。

「もうすぐ大事な試合があるの！ 私には、へらへらして何にも考えてないあんたと遊んでる暇なんてないのよ！」

「大事な試合って何だよ！」

「……っ、……」

相川は唇を噛み、口を滑らせてしまったといった感じに黙り込ん

でしまった。

基本女子と男子は同時に対外練習試合を組み、定期大会などにも男女揃ってエントリーする。だから男子部部长である俺も試合のスケジュールは一通り把握している。その俺が記憶している限り、大事な試合なんて近くにあったか？ …………… あ。

同時に加藤も思い至ったらしい。それから顔面の憤怒をさらに凶悪なものにした。

「そういうことかよ……！ 初めからそういうことだったのかよっ！」

俺が思いついたのはランキング戦だ。加藤が思い浮かべたのも、恐らくはそれで間違いないだろう。でも加藤の言葉には俺が考えている以上の裏事情があるのは明々白々。それに思考が至らずに首を傾げている——と、

「……………」

次の瞬間。

気付いた時には廊下に這いつくばっていた。

じんじんと頬が痛む。口の中にも鉄っぽいや嫌な塩味が広がっている。

どうやら、殴られたらしい。

思考に没頭しすぎて手の力が緩んだところを見逃さなかった加藤が俺の束縛から逃れて、その場で反転し俺の顔面に握り拳を叩き込んできたらしい。

背中から倒れた俺がひっくり返ってうつ伏せになり、立ち上がろうと腕を立てたところで、もう一撃。今度は蹴りなのか脇腹に重い痛みが走った。

「……薄々勘付いてはいたんだよ」

耳朶に届いたのは怒りすら通り越して冷め切った加藤の言葉。倒れた際に床に打ち付けたのか、痛みにギンギンする頭では認識するのがワテンポ遅れるが、どうにか内容を理解することはできた。

「二人でいても、なんだかよそよそしかった」

俺に寄ろうとしたところで進藤が進路を遮る。己の道を塞ぐものは全て敵と認識した破戒僧のように仏にすら手を上げようとした加藤だが、いつも百三十キロ以上の動く物体を見ている野球部の進藤には簡単にかわされ、逆に羽交締められる。それでも視線に宿る怒気、いや殺気は減じることにはなかった。

その殺気は、ただ真っ直ぐ、俺に向けられている。

「話してても殆ど俺の話題。誰とどんな話をしたか、しつこく聞いてきても俺は気付かないフリをした。俺のことを知ろうとしてくれるんだって、思い込もうとした」

進藤に抑えられ、その場から動く事は叶わないが、それでもガムシヤラに前に進もうと足を踏み出す。

「や、やめて……」

誰かの消え入りそうな声が聞こえた気がしたが、それが誰の口から漏れたものか、進藤の影になって確認する事はできない。

しかし、その懇願は加藤の中で燃え盛る火に油を注いだだけだった。ついでに酸素でも送り込んだのか過呼吸でも発症したように不揃いな呼吸を細かく吐き出している。

遂には目から、涙も溢れさせた。

「結局、こうなるのかよ」

「やめてよお……！」

後方からの涙混じりの哀願にも加藤は閉口する気配を見せない。

涙だか唾だか鼻水だか汗だか、とにかく顔面から出せるあらゆる体液を俺に向けてぶちまける。

そして、こう叫んだ。

「結局お前なのかよ！」

全くもって意味が分からない。そもそも何で殴られたのか、そこからして俺は理解していなかった。俺はコイツにここまで恨まれるようなことをしたか？ こんな殺意を向けられるほど憎しみを買っていたのか？

「お前ら二人して俺で遊んでただけじゃねえか！ 馬鹿にすんのも

大概にしろ！」

「やめてえ！」

どういうことだよ、これは。何でいきなり俺が当事者の仲間入りしてるんだ。

「紹介してやるとか言つといて最初から鼻で笑つてたんじゃねーか！ 二人で結託して無様に熱を上げる俺を見て笑つてたんじゃねーかよお！」

加藤は誰の目も憚ることなく泣き叫ぶ。

そこでようやく俺の思考が追いついてきた。加藤に相川を紹介したことを言っているようだ。がしかし、結局のところ分かったのはそれだけ。確かに加藤に乞われて相川を紹介したのは俺だが、そこに何か問題があったのか？

全てが、次の言葉で氷解する。

「幼馴染の二人でとくにデキてたんじゃねえかあ！」

……加藤の言いたい事は理解した。俺と相川が付き合ってる上で俺が加藤に紹介したとか考えているらしい。

もちろん、当たり前だが、そんな事実は一切ない。

俺はそこまで人でなしになったつもりは無い。

「んなわけあるか」

俺は立ち上がりながら、

「それはお前の勘違いだ」

「まだ言うか、この野郎！」

俺と加藤の視線が交錯する。俺は繊維一本だけでかろうじて繋がっている注連縄のような加藤との関係を修復すべく誤解であることを伝えようと試みるが、突然。

「そうよ！」

と、加藤の思い込みを肯定する言葉が割り込んできた。

——他でもない、相川の口から。

唐突な叫びに進藤も身体の位置をずらし声の主を見た。そのお陰で俺からも見る事ができたのだ。

「あたしとマツは付き合ってる！ あんたとは遊びよ、遊び！ ようやく気付いてくれたわね！ 分かったんならこれ以上私に付きまといわないで！」

手前勝手な告白に加藤は悲憤慷慨を露にするが、当の相川はそちらなど欠片も見ちゃいなかった。相川が意識しているのは、間違いなく俺の背後。

再び嫌な予感に襲われてそちらを振り返ると、そこには――

「……………」

息を呑む姫宮の姿があった。続いて涙ぐみ、身を翻す。

「お、おい姫宮！」

駆けていく姫宮の背中を目で追いながら、俺に与えられた選択肢を確認する。

一つ、ここに残って加藤の誤解を解く。どういう意図で相川がそんなことを言ったか……………いや、それはもう言を俟たない。ここで考えるべきは俺の意志だ。

一つ、走っていった姫宮を追いかけていき、今の言葉が根も葉もない嘘っぱちであることを伝える。

ここでの俺の行動が、二人への答えになる。自惚れじゃなけりやあな。

……………。

数瞬で気持ちは固まった。

「！ 待つてよ、なんで行っちゃうの……………」

相川の表情が悲痛に歪む。それを見ても俺の心は変わらなかった。「何でよお……………こんな、に……………待つても、ダメ……………なの？ それじ

やああたしは、どうどうすればいいのよお……………！」

泣き崩れる相川の姿を見て胸が痛まないと言ったら嘘になる。確かに俺の心臓は内側からズキズキと、丑の刻参りの標的にされ五寸釘を打ち込まれたような痛みを訴えているんだからな。

相川とは小学校から同じクラスになることも多く家も近所だったため親同士が仲良くなり、以降腐れ縁と称することができるような関係を保ってきた。

そのように長くつるんでいる俺でも、あんな弱々しい泣き顔は初めて見たのだ。いつもの攻撃的な言動は影を潜め、まるで心だけが時間遡行を成功させ幼少に戻ってしまったかのように俺に縋る目を向けている。いつもの怜悯な印象はそこには無く、ただ眉尻を下げて夫婦喧嘩の末に出て行ってしまった父親を引きとめようとする娘のような純粹な涙に煌めく瞳が、真っ直ぐ見上げてくる。

それでも、俺の脳裏に浮かんでいるのは昨日の部活の後に姫宮が見せた、あのはにかんだ笑顔だった。そしてリフレインされるのは『マツケン君に会えた事かもっ』や『ランキング戦。私、絶対勝つからね。また一緒に部長やろうね』といった言葉。

これが思い浮かぶってことは、悩むまでもなく答えは一つだろう。真っ直ぐ姫宮の走っていった方向を見据える。遠ざかっていった背中しかし、まだ追いつける距離にある。この学校の廊下は長い。階段の影に隠れられたら見失ってしまいそうだが、それまでにある程度距離を詰められれば問題ない。

ここはいつちよ、男の走力を見せてやりますか。

「行かないでよお……！」

相川の涙ながらの懇願が与えてくる迷いを振り切って俺はリノリウムのタイルを蹴った。これでもリレーの選手に選抜されるだけの脚の速さを持っている。……補欠だけどさ。

でも相手は女子だ。十分追いつける。

後方へと過ぎ去っていく風景の中では、教室から顔を出した同級生たちが何事かと日和見しているが外聞なんて気にしていられない。戻ってきたときが思いやられるが、後でどうにかするとしよう。

前方の背中があと数メートルまで迫ったところで廊下の終着点に到達する。姫宮は左にある階段をつんのめりつつ駆け上がって行き、体力の限界がきたのか踊り場で立ち止まった。

「姫宮」

目の前でビクツと震える姫宮の背中。振り返るのが、もつと言えは現実を直視するのが怖いとでもいうふうに、頑なにこちらを見ようとしない。

だから俺は、その肩を掴むと強引にこちらを向かせた。身体の方は比較的すんなり回ってくれたが、やはり瞼は懸命に閉じられている。

目尻に溜まった涙が一筋、流れた。それは流れども流れども溢れてきて、止まる気配がなかった。

全く。このままだったら今日の授業はどうするつもりだったのか。その涙が止まらなかったら。

「さっきの相川の言葉は全くもって違うぞ。そんなん身に憶えはない」

とりあえず己に出せる最大限の優しい声音で語りかける。それにしては我ながら、言ってること浮気した男のそれだよな。これは将来的に女の尻に敷かれることになりそうだと心の中だけで苦笑する。目を閉じたまますすん鼻を鳴らしていた姫宮もようやくその瞳を見せてくれる。それはしかし、まだ疑いの晴れていない上目遣いだった。

「俺は相川とは付き合ってない。この身は清廉潔白だ。っていうか、いつも部活で一緒にいるお前は知ってるだろ。そんな様子が皆無だったの」

「……………ほんとに？」

胡乱な目ながらも姫宮は口を開いた。どうやら信じてくれるらしい。だから、俺はここで最大の武器を放った。

さっき俺が、自分の意志で選んだ選択肢を。

「ほんとだ。俺がここに來たのが、その証拠だと思ってくれ」

すると姫宮は一度目を伏せ取り出したハンカチで目元を押さえる。顔を上げると目はやはり赤かったが、しっかりと開いてはいた。ちゃんと俺を見てくれていた。

「私」

「ん？」

「マツケン君が好き」

「ん、さんきゅ」

「私と、お付き合いしてください」

「喜んで」

こうして俺と姫宮は恋人同士になった。

姫宮の赤くなつた目元をどこかで見たことがある気がしたのは、デジャビュでも何でもなく実際に見たことがあつたからだ。それは昨日の放課後、部活動の最中。それにしても花粉症で納得した俺はどうなんだ。

俺もそろそろ、女心つてものを学んでいけないといけないな。

第八話

戻ってみると、当然ながら廊下は大騒ぎだった。とつくに授業開始のチャイムは鳴っており、各教室で授業のある先生方が到着して何事かと駆け寄っていったために今の状況が完成した。

怒りの矛先を向ける相手がなくなってしまった加藤は進藤に押さえられたまま呆然としており、相川は人目を憚ることなく号泣している。

相川のクラスメイトから話を聞いたらしい先生が思考の停止している加藤の肩を掴んで何処かへと連れて行く。それからクラスメイトは相川を抱えるようにして立たせると、帰還した俺に恨みがましい視線を向けてきた。俺の隣に寄り添っている姫宮にも。

「さいってー」

「何がだ」

「うつわ、開き直った。最悪」

最低とか最悪とか、言われ放題だな。制服の袖を摘んでくる姫宮がいなかったら、さすがに立ち直れなかったかも知らん。

俺は、間違った事は何一つしちやいない。

「俺が選んだのは姫宮だ。相川じゃない。これって、お前らが興味津々に嗅ぎまわってた一つの恋愛模様に着がけただけじゃないかと思うんだけど？」

「ちよっ……ふざけんじゃないわよ！ 言い方ってもんがあるでしょうがっ！」

お前が振ってきた話だろう。

「あんたのその無神経な言動で奈津子がただけ傷付いたと思ってんのよ！」

「事実を言っただけだろうが」

「アンタ……女を舐めんのも大概にしなさいよ」

俺と相川のクラスメイトによる睨めっこが開始された。

膝が曲がったのは、俺に飛び掛るためかね。

これ以上蹴った張ったの騒動を起こしたくないはないので、どう諫めようかのシミュレーションを開始した、その時。

「何よ……」

水の出尽くした雑巾から無理矢理に水を搾り出そうとするような痛切な声が、俺の鼓膜を振るわせた。

その痛々しい声色に、今にも床を蹴ろうとしていた目の前の女生徒も振り返る。もちろん俺もそちらを見て、声の正体を確かめた。

それは――

「何よ何よ、何でよ！ 何でなのよッ！」

涙を流したまま頭を抱えて丸くなり、現実から目を逸らそうとするように涙を振り散らしながら首を振る相川だった。潤み、そして赤くなったその目が捉えているのは、

「っ……！」

姫宮愛。

袖を掴んでいた手にきゅっと力を込めた姫宮を背後に隠すように、俺は一步前に出る。

その姿を目にした相川表情は、一層の悲辛を孕んだものに歪む。
「……たった一つ、一つしか無いんだよ！ なのに、なのに……！」
震える膝で立ち上がると、酩酊状態のような千鳥足で姫宮に近づいてこようとする。その際にも止まぬ涙は水滴となつて廊下に落ち、その相川は苦しそうにしゃくり上げる。

本当に大切なものが、ただ不条理に、自分に為す術なく、どうしようもなく、一切の容赦なく、手元から零れ落ちていった――そんな絶望を、こちらの胸を締め付けるほどに見せつけてきていた。

それが向かう先も決まっている。

「そのたった一つの席に収まるのが、どうしてあたしじゃないのよッ！」

俺への質問なはずなのに、俺など視界にも含めない。歯牙にもかけない。それが規定事項だとも思い込んでいるように相川は、
「何で愛だけが幸せになって、あたしは不幸になんきやいけないのよ！」

制服のスカートのポケットから、何かを取り出した。

それは細長く、高校生女子の手にも納まるサイズの物。

学生なら持つていても不思議じゃない。しかしそれは、人に向けた瞬間に否定しようのない凶器と化す。

コンパスだった。

握る手も小さく震えているが、その先端にある細い針は見る人にそれ以上の震えを与えてくる。

もちろんナイフなどと比べたら殺傷力など大したことは無いだろうが、それを人に向けるのはきつと、人として踏み越えてはならない一線だったはずだ。

それを相川は、越えてしまった。

俺が完全に姫宮の姿を背中に隠すのと、様子がおかしいと気づいた組担任の女教師が相川を取り押さえるのは同時だった。

踏み出しても踏み出しても一向に近づいてこない、見えてこない姫宮の姿。視野狭窄に陥って、しかも姫宮は俺の背後にいたので相川から見えるはずないが、それでも相川は足を止めようとはしなかった。

痛々しいほどの膝の震えと、滂沱と流れる涙は、とどまるところを知らず。

「……あたしは！ 小さかった頃からずっと健二と一緒にいた！ 初めて同じクラスになった小学校一年生からずっと、あたしは健二の傍にいたのっ！ あたしは健二の事なら何でも知ってる！ 健二のためなら何でもして上げられるッ！ 加藤とだって、健二が付き合ってみればって言ったから付き合った。それが健二の望みならって好きでもない男と手を繋いだりした！」

自分の経歴を誇る有名大学出身者のように、姫宮に自分の来歴を

ひけらかす。

「あたしは、あたしはッ！」

とうとう相川はその場に蹲ってしまい、それ以上は言葉にならなかった。

ここまで想われていたのに気付かなかったのは俺の鈍感さゆえ、なんだろうな。加藤の言うとおりだった。結局、全ては俺の責任か。相川は顔を膝に埋めたまま。今は嗚咽だけが聞こえる。しかし、その姿、嗚咽、雰囲気だけで、気付いてしまう。

憎んでいる——そう分かってしまう。

負けるはずないと思っていた勝負に負けてしまった、その不条理を。……そして自分の得るはずだった幸せを得た人間を。

「……………不公平よ」

顔を俯けたまま発せられた声は、身の毛も弥立つほど暗澹としたものだった。

「これであたしは途中退場？ ……嫌よ、嫌！ 絶対に嫌ッ！ なんでこんな不公平なのよッ！ 健二を想っていた時間だったらあたしの方が長いのに、どうして高々一年一緒にいただけの女に盗られなくちゃいけないのよ！」

首の筋を違えてしまいそうなほど、ショートのを髪を激しく振り乱す相川。

ふええ、と泣き出す姫宮の気配が背後から伝わってくる。だから俺は向き直ると、震える姫宮の肩を抱いた。

しかし俺のその行動は、ふと顔を上げた相川の、その狂言に拍車を掛けるだけだった。

「ちょ、どうして……？ そっちじゃないでしょ。早くこっちに来てよ。あたしを抱いてよっ！ 加藤にも身体は許さなかったから、これは全て健二のものだよ？ アンタのこと、満足させられる！ 早く、早くうう！ う、うう……………」

茫然自失。支離滅裂。それらがかえって事態の深刻さを際立たせた。

いやいやと首を振る姫宮は力いっぱい耳を塞いでいる。俺も姫宮の頭を抱きこみ、腕で姫宮の耳を重ねて塞いだ。

これはまずいと感じたらしい担任は相川を引き摺るようにして姫宮から離していく。喚き散らしている相川に何か言葉を掛けていているらしいが如何程の効果も出ないようで、それからただ黙々と、しかし表情を焦らせながら相川を俺たちから見えない位置にまで移動させた。

廊下に残ったのは静寂。

各教室から野次馬根性丸出しで覗き込んでいた生徒たちも、あまりの事態の重さに口を開く事ができないみたいだ。

向けられた経験なんて無いであろう明確な害意を叩きつけられた愛だが、呪詛に満ちた言葉が聞こえなくなつた今でも、純粹な恐怖から溢れ出した涙は止む気配を見せない。泣き止ませる方法など思いつかない俺も、ただ抱きしめる事しかできないでいた。

ついさっきまで加藤を羽交締めていた進藤が、ぽんつと一度、俺の肩を叩いてきた。実のところ教室に戻るのが少し怖かった俺としては、一人でも味方がいてくれたことに安堵すると、胸元の熱に声を掛ける。

「もう大丈夫だ」

少しでも恐ろしい言葉を払拭できるように、少しでも向けられた敵意を忘れられるように、優しく。

「もう大丈夫だから。絶対、俺が守ってやるから」

「……………うん、……………うん」

何度も頷いてくるが、それは俺への配慮だと分かってしまう。姫宮自身は、まだ少しも今の恐怖から逃れられていない。

もしくは、何の確証もない俺の軽薄な慰めに気付いてしまったのか。

「……………くっそ」

なんでこうなるんだろうな。此方を立てれば彼方が立たない。双方が成立することなど有り得るのだろうか。いや無理だな。日本が一夫一妻制の国である限り。

それでも日本人は断絶することなく、日本国は今も続いている。少子高齢化が叫ばれてはいる現代でも、確かに毎年新しい命は誕生している。それは一夫一妻制の日本に於いても、ちゃんと愛し合った夫婦が生まれているという事だ。

世の中、上手くいつてるよな。

俺にはそれが、奇跡のように低確率な事象に思えて仕方ない。

……幸せになるってのは、こんなに難しいことなのかよ。

想った人と恋人同士になって、しかしそれを快く思わない人間もいて。快く想わない人間は想いの叶った人間に対して殺意にすら達するほどの憎悪を抱く。その憎悪を受けた人間は嬉しいはずの幸せを見失う。

こんなんでは幸せなんて、到底手の届かない高さにある雲を掴むような、絵空事と同じじゃないか。

もちろん、今の俺たちの置かれた状況が最悪のものだからこそ抱く大袈裟な羨望及び嫉妬であるのは理解している。世の中には、上手くいった事例が五万と転がっているんだからな。

それでも俺は、悲嘆を禁じ得ない。

——世の中、上手くいかないもんだ。

第九話

あれから、四日が経過した。

以来、登校してきていない相川。担任佐々木氏は詳しく教えてくれられなかったが、風の噂では療養施設に入ったとかどうか。嘘か真かは知る術も無い。

実際に暴力を振るった加藤は三日間の自宅謹慎を食らった。しかし、それを過ぎても教室に姿を現すことはなく、もしかしたらこのまま学校を辞めるのではないかと実しやかに囁かれていた。

女子に手を上げたとなると全生徒の少なくとも半分は己の敵に回すのだ。もしかしたらフェミニストの男子たちからも蔑みの目を向けられるかもしれない。確かにそんなコミュニケーションには戻りづらいよな。

かく言う俺も、相川のクラスの女子からは白い目で見られるようになった。今のところ具体的な行動は起こされていないが、いつか爆発しそうで怖い。こういう色恋に関しては常に女性有利な状況が続く。加藤に関しての相川の発言は男子からしたら顰蹙モノだろうが、C組の女子はそこに一切言及しない。どうせ俺も言えないから別にいいけどさ。

深刻なのは姫宮だ。頭から離れないらしい映像のせいで学校に行くのを嫌がり、友達が迎えに来てようやく制服に着替え始めるといふ日々が続いている。また、俺を見ると相川の呪詛を思い出してしまつらしく、クラスメイトたちからも止められて、あれから一度も話す機会は得られていない。

そして卓球部。言ってしまうえば二週間の休部がペナルティとなった。主な原因は加藤の傷害だが、それ以外のいざこざも全て卓球部員絡みだったため、事態を重く見た学校側はこのペナルティを決めたようだ。それでも他校の生徒相手じゃなかったので、上層部の人たちはかなり譲歩してくれたらしい。

現在はというと。通常授業が終わった放課後に、その説明をするため卓球部員に集まってもらっていた。卓球場は使えないので学校側から宛がわれた会議室を使用している。もちろんだが、その場に加藤、相川、姫宮の三人はいない。

こんな時まで呆けているわけにはいかなかったのか、高橋女史も真面目な顔で俺たちの前に立っている。

同じ二年生は何を言われるのか分かっているだろうが、一様に首を傾げている一年生たちは四日間の間何かと理由をつけて練習を休みにしていたこともあって訝るような目を高橋女史へと向けている。どちらに対しても申し訳ない。

顧問としての責任からか、高橋女史が初めに口を開いた。

「えー、諸君に集まってもらったのは他でもない。卓球部のことで重要な話がある」

この顧問からはありえない程のシリアスな語り口に、さすがに重要な話が良い知らない知らせであると悟った一年生たちは緊張の面持ちで高橋女史の次の言葉を待っている。

「卓球部は、二週間の間、休部することとなった」

その瞬間、会議室はざわついた。疑問や悲しみの声が乱れ飛び、理由を教えると声を上げる。それが当然の反応だよな。一年生たちがどれだけ真剣に卓球に打ち込んでいたか、一番知っているのは部長である俺だ。

「あー、その理由だが――」

だからこそ、

「俺から話します」

俺に話す義務がある。休部の原因の当事者としても。

いきなり部長である俺が立ち上がって困惑気味の一年生たちに説明するのは四日前の出来事。あれだけ卓球部員が関わっていたら名前を伏せる意味もないかとも思ったが、それでも一応隠し、俺は一連の事実を包み隠さず話した。

最終的には部員全員が、黙って俯いてしまった。

「本当に、すいませんでした」

頭を下げる。そして、この事態を引き起こした俺自身の責任を取るため、高橋女史へと近づいていく。

さすが年功のある先生は俺がこれから何をするのか分かっているようで、特に何の感慨もなさそうな無機質な目で俺を見ている。

なんだか、その方が未練なく終わらせられそうだ。

「高橋先生」

「なんだ？」

「卓球部を退部します」

再び会議室がざわつく。そちらを見てみれば二年生も当惑気味な表情になっていて少しだけ嬉しくもあった。俺のことを、まだ見限ってはいなかったらしい。

ポケットに入れておいた退部届けを高橋女史に渡しながら思う。

惜しまれるうちが花、か。その通りだよな。

「部長は、それでいいんだな？」

わざわざ部長って強調しなくても。不意に苦笑が漏れた。

「これしか思いつきませんでした。ほら、よくニュースとかでやってる引責辞任ってやつです」

「……全く、実直というか愚直というか」

高橋女史も嘆息しつつ苦笑いする。お互いの苦笑を交換し、高橋女子は俺の退部届けを懷に仕舞——おうとして。

「な……！」

その場で真つ二つに破いてしまった。

「何するんですかつ！俺の悩み抜いた結果を！」

「残念ながら、それは時間の無駄だったな」

さらに細かく引き千切つていき、だいぶ細かくなったところで、それを俺の頭上へとばら撒いた。

「お偉いさんからのお達しでな。お前には今回の汚名を払拭するだ

けの戦果を期待しているそうだし」

紙ふぶきと一緒に、高橋女史の半笑いの声が届く。

「高校生が隠居なんざ五十年早い」

バシッと。脳天に顧問の掌が叩き込まれた。その手の感触に少しだけ涙ぐんでしまったのは秘密だ。

それはともかくとして、部員たちが、そんな甘っちょろい事を許してくれるのか。

「見てみる」

俺の背後に回りこむと、上の方から回りこむように額を押さえ、強引に顔を上げさせられた。

そこにあつたのは、

「……………」

不承不承ながらもしょうがないといった感じの部員たちの笑顔。

「部長がいなくなったら俺たちどうすりゃいいんすか。他の二年生に信頼できる人なんていないっすよ」

最強少年進士君の言葉に、なんだとこらー、という声が二年男子の中から起きる。

「なんか部長とか面倒くさそうだし、俺やりたくねーから」

「そうだし、部長だったら部員のためにせっせか働きやがれ」

進士君に突つかかっていた以外の二年生の間からも、明らかに俺を気遣う声が上がった。

くそ、嬉しいじゃねえか。

不覚にも目に涙が滲んでしまった。直前に涙を溜めてしまったこともあって危なかったが、そんな恥ずかしい感涙を流すまいと、噛み切らんばかりに唇を噛み締めて耐える。

でもそこで、あつ……………と、重要な懸念を思い出してしまった。

…………卓球部は二週間の休部なのだった。少なくともその間は練習できない。二週間練習ができないっていうのは、選手にとってはかなり厳しい。卓球は反射神経のスポーツなので、少しでもサボるとすぐにスピードに付いていけなくなってしまう。これでは、お上を

満足させるだけの戦果を挙げるのは苦難の道程になること必死。

しかし、それにも否定の声が来た。

「残念ながら、それも杞憂だ」

卓球部は、顧問からしてサイコメトラーだったようだ。

「確かに卓球部は休部する。でも各個人が集まって練習する分には何ら制約を受けていない。卓球場は使えないが、すぐ近くの公民館の体育館ならいくらでも練習できるだろう。その館長とウチの校長が将棋仲間らしくてな。部活動がある日の三時から六時まで優先的に使わせてもらえるよう計らってくれたらしい。三時間七十円らしいが、それが制裁金だそうだ。それくらい払え、勤労学生」

ウチの学校バイト禁止でしょうが。

高橋女史の心遣いには気付いている。今の心の声は俺の全力の照れ隠しだ。

ともあれ暗澹たる深淵に堕ちてしまった卓球部にも明るい兆しが見えてきた。俺たちはまだまだ神様に見放されてはいないらしいな。希望が見えてきたことで一年生たちからも拍手が起こる。シリアスな状況のはずの卓球部から拍手喝采が起こるのもどうかと思っただが、あえて止めさせる事はしない。

ガタツと、誰かが席を立った音が聞こえたのはその時だった。

「おっと、異論のあるヤツがいたみたいだな」

見てみると、それは二年の女子部員。

——相川と同じクラスの。

俺を歓迎する空気に腹を立てて会議室を出て行くのかと思ったら、意外にも俺に向かってきた。しかし、その目には敵愾心がバリバリで、目前で立ち止まった時の迫力は凄まじかった。数秒睨まれていたら自動的に体が土下座の体勢に移行してしまいそうなほどに。

「……私は、あの子をあんな風にしたあんたを、許したわけじゃない」

一年生たちに聞こえないよう小声で囁いているのに、あくまでも相川の名前は伏せる。

「でもそれは、私個人の感情。あんたたちの問題に口を挟める立場じゃないっていうのは分かってる。だから……」

正面から俺に相對してくる。正直、こうゆう方がありがたい。

「私の感情を、ここで発散させる。いいわよね」

「……ああ」

ビンタでもラリアットでも何でも来い。俺は目を瞑る。
しかし。

「……？」

ぱしつと軽い感触で俺の頬に当てられたのは、掌ではなかった。
いや、平手ではあるのだが、彼女の掌と俺の頬の間に何かがあるような。相川のクラスメイトも手を離そうとしないので、やはりそこに何かがあるのだと指を持っていく。頬に触れていた、そこそこの厚い紙のようなものを摘むと目の前に持つてくる。

それは封筒だった。どこか見覚えのある丸っこい字で俺の名前が書かれた。

「……なんだ？」

「せいぜい悶々としなさい。それを見て私は楽しむから。それが、私の発散方法」

意味深な言葉に急かされるように封筒をひっくり返す。

裏面には差出人の名前があった。

——相川奈津子、と。

「これって……！」

「ちよつと前に会える機会があつて、その時に渡されたの。言つてくけど中身は読んでないから」

彼女は凝つた首を回しながら、

「それ読んで、悩んで、いろんなこと考えて、それでも全国大会くらい行つて見せなさいよ。そしたら他の子たちの気も晴れるでしょ」
嫌らしい笑みも天使の微笑みに見えたりしたのは俺の精神状態に

よるところが大きい。

「青春だねえ」

アホ顧問の陳腐な呟きは俺以外の耳にも届いていただろうか。

第十話

本日は一時解散となった卓球部。

早速公民館の体育館に行つて来ますつ、という威勢のいい声もちらほら聞こえ、また以前の雰囲気に戻りつつあることにほつと胸を撫で下ろした。

ただ今の俺はというと、屋上にやつて来ている。一人になれる場所が欲しかったのだ。

なぜなら、相川からの手紙を、誰にも邪魔をされことなく読みたかったから。家に帰る時間も惜しく、それでは校内で一人になれる場所はどこかと考えたところ屋上にたどり着いたのだ。

手紙といえば便所が定番な気もしたが、さすがに便所で読む気にはなれないよな。

縁まで歩いていくと腰を下ろし、手すりに背中を預ける。少し涼しく感じる夕刻の風に飛ばされないよう力強く封筒を握り締めながら、慎重に中から便箋を取り出す。

これが、その全文だ。

『そういえば、手紙なんて書くの初めてかも。なんだか恥ずかしいな。

改めまして、相川奈津子です。

まず初めに、書いておかないといけないことがあるの。

ごめんなさい。

思い返してみるとあたしもなんであんなことしたんだろう。健二が愛を選んだのに、あたしにはそれが認められなくて、ただただ健二に守られてる愛を見てるのが辛くて、気付いたらとんでもない事をしてた。

怖がらせてしまった事、本当にごめんなさい。

でもね、はつきりと分かったこともあるの。

あたし、やっぱり健二のことが好き。それくらい、健二に好かれてる人に対してあんなことをしてしまうくらい、健二のことが好き。これだけはどうしても譲れない。

健二が選んだのが、例え別の人だったとしても。

漠然と好きだっけ気付いたのが小学一年の時だった。健二と一緒に小学校と中学校を過ごして、中学生の時に健二が卓球部に入ってたって聞いて、私もそれを追いかけていった。健二がこの学校を受験するって聞いて、ちよつとランクの低かった私は一生懸命勉強した。それで一緒の高校に無事合格できて、同じ卓球部に入った。

いつ気付いてくれるかな、いつになったら告白してくれるかなって、ずっと待ってたんだよ。

なのに健二は加藤君と付き合ってみないかってあたしに言ってきた、健二に言われたから付き合った。健二以外の人から手を握られるのは嫌だったけど、こうしてれば健二が私を迎えにきてくれるんだって必死に耐えた。

なんて、責任逃れだよ。ホント、自分で自分が嫌いになりそう。その報いなのかな。健二は、ずっと待ってたあたしじゃなくて、愛を好きになった。

ずっと一緒にいたあたしは知ってたのに、健二が鈍感だっけ。それなのに自分から動こうとしなかったあたしの不戦敗。それにやっとながが付いたの。

どうしようもなく、あたしは弱かったってことにも。

でも、どうしても諦めきれない。

でも、今のあたしのままじゃ、また同じ事をやっちゃう気がする。だからちよつとだけ。ちよつとだけ学校休んで、心を鍛え直します。

凄いいショックだったんだよ。健二が愛を選んだってことじゃなくて、私が心を患ってるってお医者さんから言われたこと。これまでも自分には一切縁の無い、これから関わることなんて一生無いつて信じてたカテゴリーに入れられちゃったんだから。なんだか自分っ

ていう人間を否定されたみたいで、凄く辛かった。

でも考えてみたら、そう思われても仕方ないこと、あたしはしたんだよね。

だから、このレッテルも甘んじて貼られるつもり。

待っててね。すぐに戻ってきて、真っ先にあたしのこと選ばなかったこと後悔させてあげるから。でもそこで、ちゃんと謝ってくれたら許してあげる。なんて、ね。

ここから先は愛に伝えて。

あたしのせいで学校に行くの怖がってるってこと、由美から聞いた。

本当にごめんなさい。怖がらせてしまったこと、あんなことを言っちゃったこと、心から後悔してる。反省してる。

でも、それでも、あたしは健二を諦めきれない。戻ってきたときに愛と付き合ってたって、諦められない。今度はちゃんと女の魅力で略奪してやるんだから。

だから、愛も身を引くなんて真似しないで。知ってるでしょ、あたしが負けず嫌いなこと。何回もランキング戦の決勝で負けて、泣いてたあたしのこと知ってるでしょ？

だから、正々堂々と勝負して。

あたしが戻ってくるまでは、あなたに健二の彼女の椅子は譲っておいてあげる。

健二は変なところで優しいから、こんな手紙出したらあたしに気を遣ってあたしと付き合いおうって思うかもしれない。でもそんなの願ひ下げ。あたしはちゃんと一番の女として健二に選んで欲しい。

だからあなたも、せいぜい頑張つて。あたしに期待した健二の心があなたから離れていかないように。

そして戻ってきたときに、あたしはもう一度勝負を挑むわ。恋愛でも、卓球でも。

次のランキング戦では絶対に勝って、女子卓球部部长にあたしになって、健二と思う存分いちゃいちゃしてやるんだから。

最後にもう一度。本当にごめんね。あんなことしたあたしとなんて向き合ってくれるかは分からないけど、もう一度、あたしにチャンスをください。

それじゃ、またね。

相川奈津子より。

P.S.

いつものあたしの口調と違って健二は驚いたかもしれないけど、これが本当のあたしの言葉。いつも喉のところで引っ掛かってどうしても健二相手には言えなかった言葉。でもこれが、一番健二に聞いて欲しかったあたし自身の言葉。

戻ってきたら、ちゃんと伝えるから』

……。

……長。便箋三枚かよ。俺には書けそうにない長文だ。

由美つてのは確か俺にこの手紙を渡してきた相川のクラスメイトの名前だったか。本名は西岡由美、だった気がする。まあ、そんなことはどうでもいいな。

しかし、よくこんな恥ずかしい手紙書けたもんだよな。

くそ、ブタクサの花粉め、鼻がグジグジ言いやがる。鼻水が垂れて文字を滲ませないよう、念のため便箋を丁寧に畳んで封筒に仕舞った。

それをポケットに入れると立ち上がって、手すりに肘をつく。いつの間にか空には朱色が広がっており、本日のお勤めを終えた太陽が就寝しようとしていた。まあ、普通に考えて休む間もなく反対側の地球を照らす仕事が待っているんだろがな。

それにしても、夕日つてのはこんなにぼんやりしてたっけか。顔

面に真正面からぶつかってくる風がどうしてか俺の目尻と頬を冷やしていくが、その理由がなんなのかは確かめないことにした。

こんなに想われていたっていうのは男として純粹に嬉しい。相川の純粹な想いは、ただちよつと純度が高すぎただけなのだ。それを本人も自覚してくれているようで、手紙の文面も思つたよりもポジティブな内容だった。姫宮に対する気持ちは本物だろう。

これを、姫宮に伝えてやりたいな。

太陽が逃げおおせようとしている逆側からは、濃紺から橙へのグラデーションが続いている。そこに、俺の脳裏に焼きついている姫宮のはにかんだ笑顔を投影してみた。

並んで相川のブスツとした顔が出てくるのはどういうわけだろうな。

背後でがちゃつと重い扉の開く音が聞こえたが、ソイツが誰だか予想が付いた上に、なぜだか知らんが結構確証もあつたので、振り返りはしなかった。

夕焼けに染まる街を眺め、無意識に目で追っているのは、いつかのもつさりした木。

はは、遠目からでも簡単に見つけられるくらいもつさりしてやがる。

「黄昏れてるわね」

「そつという時間帯だろ」

声は震えなかった。

意味があるんだかないんだか自分でも分からない言葉の応酬を経て、ソイツは俺の隣の手すりに肘をつく、同じようにもつさりした木を眺め始めた。視線は俺よりも高い位置を捉えているようにも見え、そこに何かあるのかと訝つたところで木の上空にはこやつのコスモが広がっていることを思い出した。

俺が注目したところで何も見つけられるはずは無い。

「もつと沈んでるかと思つたのに」

「残念だつてか」

「よく分かったわね」

一度買った方がいいのかも知れないな、喧嘩。

ソイツは攻撃的な色の光に目を細める。

「人間って、どうやって幸せを感じてるんだと思う？」

「は？」

藪から棒に随分と哲学的な話題だな。

「どうやって……か。好きなことをして、とか？」

「どうして好きなことをしていると幸せなのかしら？」

「楽しいから、だろう」

「どうして楽しいと好きになるのかしら？」

これは禅問答か。

「……………心が満たされるから、とかじゃねえの。……………そんな疑問、俺じゃなくて著名な心理学の先生にでも訊いた方がいいぞ。ちゃんとした解答が欲しいんならな」

「そんな必要はないわ。だって今の質問に唯一無二の答えとか無いもの」

俺はまた馬鹿にされたんだろうか。

ソイツは滑らかな烏の髪を風に遊ばせながら、その艶によって朱の光を辺りに乱反射させる。

「そもそも私とあなたの解答だって違う」

ほお。

「そんじゃ美月さんにとって、幸せはどんなふうにして感じるものなんだ？」

ソイツ——コスモスこと弓削美月に挑戦的な流し目を向ける。

「簡単よ」

向こうも俺に倣いこちらを見て、

「人の不幸を見つけたとき」

何時ぞやのとびっきりの笑顔を見せた。

思い出す。

あのもつさりした木の下で俺に宇宙が見えるかと問い、見えないと答えると彼女は『幸せ』と呟いた。

俺から傘を奪い取ると、どんどんと雨に全身を濡らしていく俺を見て彼女は最高の笑顔を浮かべた。

ついさつき、彼女はもつと沈んでいると思っていた俺が比較的明るかったことを、残念だと言った。

何だ、この性悪エピソード三連発は。

「……………最悪だな」

「そうかしら」

胸を張るな。

「私だって昔は信じていたのよ。この世には絶対的に幸せなものがあるって」

少し強くなってきた風に髪を耳元で抑えながら、

「でも、そんなもの無いじゃない。どこにも」

まだ二十年も生きてない小童が何を言う。

「誰かが幸せになれば別の誰かが不幸せになっている。生きてる人が全て幸せになれるなんて、世の中そんな上手いことはない。あなただって今痛感してるでしょう？」

「……………」

「この世界って、そんなもののよ。馬鹿正直に幸せを掴もうとしても誰かの恨みを買うだけ。私嫌よ、誰かからあんなこと言われるの」

反論できないが、今のは少しカチンと来た。

「だから開き直って私は止めたの。そんな幻想を捜し求めるのを」
確かにコスモスの言う通りのことを俺も思ったりした経験はある。
でも俺は今しがた、それをポジティブに乗り越えようとしている
ヤツの手紙を読んでいたところだったんだ。お前のようにネガティブにならず。卑屈にならず。

……………って、同じこと考えてた俺が言えた義理でもないな。

目の前で輝く攻撃的な色の太陽にコスモスは目を戻す。

「他人の不幸を見つけて、その不幸に陥ってない自分は幸せなんだ。そんなふうに第三者的に妥協した幸福こそが、私は本当の幸せだっ
て思うわ」

……………なんだかな。

「……………それって、空しくないか？」

「ええ、空しいわね」

もし本当にそんなことでしか人間が幸せを自覚できないんだつたら、人間が生きている意味ってなんなんだろうな。

俺は他人の不幸を見て幸福になる。他人は俺の不幸を見て幸福になる。何だこのつまらん傷の舐め合いは。

とは言っても俺にだって思い当たる節はある。普段生活していると、無意識の内に自分より程度の低い人間を探している、もしくは誰かをそう思い込もうとしていると気付く時がある。時にはそれが親しい友人であつたりするのだから自分の事ながら性質が悪い。

それだけ人間が弱い生き物ってことかね。だとしたら、妥協せざるを得ないつても頷ける話か。

しかしながら、そんなことを承知しない人もいる。その人たちは決まってこう言うだろう。

生きているだけで幸せだ。

生きているだけで幸せってか。そんなの世間を見ていない、いや見ないフリをしている大人たちが我が身可愛さのあまり吐いた妄言なのは知っている。

でなければ、それが幸せの境地なのか。他に幸せが見つけれないから全ての人に共通している『生きている』という事象を根本的な幸福と認めることで満足していると自分に必死に言い聞かせるのか。

……………。

だあ——！

さつきコスモスに対して二十年も生きてない小童とか考えただろうが！ それは俺も同じだろう！

「結局、俺たちに出せる答えじゃ無さそうだ」

手すりを勢い良く両手で押し出す。そうやって俺は身体を離れた。

「ふーん。そう」

「俺たちはまだ子供だ。子供なら子供らしく、難しいことはとりあえず棚上げして生活するのも、いいんじゃないか？」

踵を返す。

「逃げにしか聞こえないわ」

「仰るとおり。でも事実だろ？」

扉を開け、滑り込む。後ろ手に閉めながらチラッと背後を見ると、コスモスは外に目を向けたままだった。

十一話

やはり姫宮とは接触できそうない翌日、教室にて。

友人の一人と一緒に席を立つた姫宮を離れた自分の席から見送ったところで、教室に残っているもう一人の姫宮の友人に声を掛けた。
「なあ」

「うん？ あ、松本君……」
「気まずそうに、ははは……なんて乾いた笑いを漏らさんでくれ。めげてくる。」

落胆が表情に出てしまったのか、その女生徒は「ち、違うんだよ」と慌ててわたわたと両手を振ってきた。まだ見放されてはいないらしい。

「これ」

その友人に差し出したのは、昨日相川のクラスメイトから受け取った例の手紙。

「帰りしなにでも姫宮に渡してもらえないか？ 教室じゃあまだ落ち着けないだろうし」

首を傾げながら封筒を受け取り、宛名を見て眉を顰める。そしてひっくり返し、今度は仰天した。

「え、え？ ちょ、これって——」

「何も言わずに渡してくれ。その文面にアイツの今の気持ちが書いてある。そこに姫宮へのメッセージもあった。俺に伝えてくれって書いてあったけど、それはできないから」

俺は頭を下げる。さすがに周りのクラスメイトも注目し始めるが構ってはいられない。

「頼むつ。なんなら中身を確認して口頭で伝えてくても構わない」
返事は無い。ので、俺も頭を上げるわけにはいかない。

こんな真剣に誰かに頭を下げるなんて、ちょっと前までは考えもしなかったな。最近はやたらとぺこぺこしているが。

それだけ責任のある位置にいたってことなんだよな。俺が無自覚だっただけで。

待っていた時間は十数秒。そろそろ姫宮が戻ってこないかとヒヤヒヤしていると、少女の嘆息が聞こえてきた。

「分かったよ」

ガバツと頭を上げた。確かめるように姫宮の友人と視線を合わす。心の奥底を見通そうとしているような、鋭利に研ぎ澄まされた視線。それは俺への試験にも思えた。

「愛に渡しても大丈夫な内容なんだね？」

「ああっ、それは保障する」

「なら、うん。分かった。ちゃんと渡しとく」

「ああ！ さんきゅ、恩に着るっ」

謝意を述べると俺は急いで己の席へと舞い戻った。そこで待つてくれている進藤の存在に、男ながらに惚れてしまいそうだ。

あの騒動以来、やはり俺にも敵対的な男は増えた。きっと姫宮や相川に惚れていた男子たち、それに加藤を糾弾したであろうフェミニストの皆様だろう。

それでも、このクラスの中ではアンチも表面的にはおらず、他クラスのアンチからは俺を守るように友人たちが振舞ってくれ、それは本当にありがたかった。お前に学校辞められたら宿題写す当てが無くなるとか言っていたが、そんな配慮は照れくさいったらありやしない。

間一髪にも、そのすぐ後に姫宮は戻ってきた。遠目から見ても、その表情に何か含んだような色はない。あの友人も何気なく振舞ってくれているので、とりあえず大丈夫そうだ。

俺が席に座ると、進藤を初め他の友人たちも続々と集まりだし、昨日の試合結果を踏まえた野球談義が開始された。

そこで昨日のコスモスとの会話を反芻し、不意に考える。

——こんなのも幸せにカウントしてもいいんじゃないか。

漠然とだが、この世界も捨てたもんじゃない、なんて陳ねたことを思った事實は、即座に日銀金庫よりも強固な心のロッカーへと仕舞い込んだ。

十二話

放課後、全卓球部員延べ三十名がそろそろ連れ立って向かったのは公民館。受付の初老のおばさまにも話は伝わっているのかにこやかに体育館の使用手続きを済ませてくれた。

一人七十円の使用料は前払いであったため、揃って財布をじゃらじゃら言わせる部員たち。俺はそれを抑えて全員分、ちょうど二百円を支払った。

慌てて俺に小銭を渡してくる部員たちだが、もう少し俺の気遣いを受け入れる。

「今回は俺が全額持つ」

「え、でも……」

「ただし今日だけだ。毎日二千元以上も出費してたら、俺は簡単に破産する」

おばさまに大量のネットを受け取ると部員たちを置いて先に歩き出す。数瞬の後にばたたと追いついてくる足音に、なんだか知らんが顔が綻ぶのを抑えられなかった。

しかしながら、ここで誤算が一つ。

三十人が同時に台を使う場合、少なくとも十五台が必要になるのだが、体育館には十二台しか置いてなかった。シングルで使っているのは六人も余りが出てしまう。

となると、いくつかの台はダブルスやるしかないか。高速演算開始。……終了。

「しゃーない。四台が三列あるうちの一台ずつはダブルス用にする。四十五分交代でローテーションしてくぞ」

はい、という悲喜こももな返事とともに部員たちが散らばっていく。それぞれがペアを作っていく、そのうちの数ペアはお互いに声を掛け合って率先してダブルスの台に入っていく。

もちろん言い出しっぺであり部長の俺がそっちに入らないわけに

もいかず……、……………そもそもペアが作れないのはどうしたことか。

他の二年男子はとくにいつものペアで組んでしまっているし、余りはいない。でも、来ているのはびったり三十人のはずだから余りは出ないはずなんだが……。

体育館を見渡して……………いた。

そりゃそうか。卓球部に入りたてな上に、この前まで相川が相手してくれていたアイツも現在独り身を謳歌しているはず。だとしたら独り身同士で組むのが筋だろう。

「おーい美月さん」

いつものように長い髪を結っているアイツ——コスモスは部屋にある練習用のラケットを手持ち無沙汰にジャグリングみたく上に投げ上げながら壁際に立っていた。

名前を呼ぶと、ラケットを追うように宙を彷徨わせていた視線を俺に向ける。見てなくともきつと、落ちてくるラケットを掴みそこねることなんてないんだろうな。

近寄っていくと、コスモスはどうしてか迷子を安心させるお姉さんのような優しい笑みを浮かべた。なのに俺の頭には嫌な予感しか浮かんでこない。

「あら、どうしたの僕？」

迷子を安心させる笑顔。そう、いわばデパートの迷子センターの係員の笑顔。表現そのままだったな。

「なんだよそりゃ」

「だってあなた子供なんでしょう？」

そこが伏線か。めんどくせー。

「子供にも年齢の幅ってもんがあるだろう。俺は今十六、もうすぐ十七だがそれだって立派な子供だろうが」

「そうね。でも、自分の事を子供だって自覚してる人ほど大人な人はいないと思うわ」

もうお前と禅問答する気はない。

「それよか、美月さんも相手いないんだろ？俺と組んでくれないか？」

「あら、いいの？」

「いいのっていうか、余り者同士他に組む人もいないだろ。妥協だ妥協」

「ふふ、そうね。妥協って大事よね」

「ご機嫌になつてもらったところで俺たちはダブルスの台に移動――しようとしてみれば何故かもうスペースは埋まっていた。いつの間に関にそんなに人気になったんだ、ダブルス。いつもシングルの練習しかしてなかったから新鮮なのだろうか。」

「というわけで、空いていたシングルの台を確保した。」

「おっす部長」

ラケットを置くとすぐに隣人から声を掛けられた。隣の台を占領していたのは最強一年生の進士君。

「ダブルスの時一緒にやりませんか？」

「ああ、それは構わないけど――って！」

進士君の本日の相方を見て、進士君が浮かべていたニヤニヤ笑いの意味を知る。

「……ふふふ、叩きのめしてあげるわ」

休部の説明をしたときのビンタ騒動で、どうやら俺とその人の間で何かがあったのだと後輩たちに勘違いされたいと噂に聞いた、姫宮と相川が抜けた現在の女子卓球部二年の中で最強のおなご。

西岡由美さんがそこにいた。

「あんたのせいで要らん誤解を受けて、ストレス溜まってたところなのよ……」

「……それは俺のせいなの？俺がストレスの捌け口になんないといけないの？」

今のこの人の様子からすると、正面に立ったら間違いなく『あー手が滑ったー』とか一本調子でぼさきながらラケットをふっ飛ばしてくる。俺の眉間目掛けて。

でも相方に恐らく俺とも比肩するであろう実力の持ち主である進士君を指名した辺り、本気で卓球で叩きのめそうとしてるのかも知れない。両方とも混合ダブルスだし、それだとありがたいんだけどな。

笑いを噛み殺している進士君の頭を一発はたたきながら、このまま怖気を催す理不尽に震えていても仕方ないと頭を切り替えて、俺も正面を向く。

「そんじゃ、何や……………る？」

ところがコスモスが聞いている様子はなかった。熱心に視線を向けているのはどこかと見てみれば二つ隣でやっているダブルスの試合。入れ替わり立ち替わり打つ人が変わるダブルスのルールでも覚えてるのだろうか。そういえば、まだ教えてなかったな。

「ねえ健二」

「なんだ？」

「なんで二人は交互に打ってるの？」

「そうゆうルールだからだ」

「どうしてサーブをクロスにしか打たないの？」

「そうゆうルールだからだ」

「なるほどね」

最早、ダブルスの特殊ルールを完全に把握したらしい。見てれば分かるとは言っても、気付くのが早すぎるだろう。さすがはニュータイプ。

疑問は解消したのか、コスモスがこちらに向き直った。

「それじゃ、何しましようか？ 早く決めてもらえると助かるんだけど」

理不尽なのはここにもいた。そもそもお前待ちだつつつの。文句を垂れるのは内心だけにしておいて、相手から見えないよう嘆息で憂鬱を吐き出すと真面目に練習メニューを考え始める。

一通りラリーはできる。スマッシュも打てる。ドライブも打てる。他に基本的な事っていったら……………アレ、だな。

「サーブの練習って、やったか？」

「いいえ、まだね」

ふんぞり返って上から目線なのは多少気になったが、コイツに何を言っても無駄だ。

「そんじゃ、サーブやるか」

「分かったわ」

ボールを渡してやると、それっぽい構えに入った。こいつの場合それがフェイクでも何でもないから始末に終えない。

「まずは好きなように打ってみ」

軽い調子で言いつつ、しかし今回ばかりは気を抜かない。どんな回転のサーブが来ても対応できるように腰を落として待ち構える。

「いくわよ」

宣言するや否や、ボールを高く投げ上げた。投げ上げの際に回転を掛けちゃいけないことも既知のよう。ちゃんと無回転だ。回転を掛けないで球を垂直に高く投げ上げるのは俺だって至難の業なのだが、コイツはそれを難なくやってのける。

全く、人の自信を簡単に叩き壊してくれる。

言ったら喜ぶだろうから言わないけどさ。そんなの癪だから。

ともかく、今はコスモスのサーブに集中だ。

ラケットの振りを見逃さないよう意気込みコスモスを注視すると、目の前ではボールの落下に連動するようなスピードでコスモスもその場にしゃがみこんでいる。

……ん？　しゃがみこんでいる？

「……！」

——それって王子サーブじゃねえかつ！　どこでそんな大技憶えやがった！

なんて考えるのは後だ。余計な事を考えていたら、これは……やられる！

王子サーブを実際に受けたことなどないが、ラケットの動きから見て下回転系のサーブのはずだ。だったら正攻法のツツキで返す！

果たして――。

「あー……」

ボールは無情にも、ふんわりゆったりとした山なりで相手コートへと落ちていった。レシーブ自体が高く上がったため、バウンドも高め。

それはつまり絶好の打ち頃ボール。

「はっ！」

気合一閃。コスモスがラケットを振り抜く。そして俺は。

――再び己の脇を抜けていく高速の物体を目にすることになった。

『……………』

見ていた誰もが言葉を発せないでいる。

俺はその場にしゃがみ込み、体育座りで反省会。誰もが遠ざけそうなほど背中に陰鬱な影を背負っているその肩を、果敢にも叩く者がいた。

進士君だった。

「ど、どんまいっすよ。部長」

震えている君の手が何よりの慰めだ。この無力感や虚脱感、絶望感並びに恐怖感は俺だけに与えられたものじゃないんだよな。

「なに？ どうしたのよ皆して」

コイツの性格を知った今では、今のセリフも確信犯に思えてくる。

「……皆、人間の新たな可能性に感動してるんだ」

「？ 前にもそう言ってたけど、どういう意味よ」

「……そういう意味だ」

過去の会話を追体験しつつ気力を振り絞って立ち上がった。俺の思ったとおりならば、きっと現在のコスモスの内心はウハウハに違いない。何せ、自分以外の全員を絶望の淵に叩き落したんだからな。顔面引き攣っている西岡さんよ、ウチの相方はどうだい。反則だろっ？

対戦が楽しみだ。……………俺としては複雑な気分だが。

十三話

今の時点で大会に出ても結構いいとこまでいけんじゃね？ と漏れなく全員に思わせるだけの鬼才を遺憾なく発揮してくれたコスモス。お陰で口から漏れるのは溜息ばかりだ。感嘆かもしれないし、諦観かもしれない。その辺りは各人の判断に委ねるとしよう。

あれだけ俺を叩きのめすと言っていた西岡さんも、卓球台を挟んでコスモスと対峙したときの表情は困惑と緊張と畏怖がごちゃ混ぜになってガチガチだった。

進士君はそれほどでもなかったが残念ながらこれはダブルス。相方が使い物にならないければ勝利はありえない。

お陰さまで、ストレートで西岡・進士組を下すことができました。こちらが奪った合計三十三点のうち四割くらいはコスモスが覚えたての高速ドライブと強烈スマッシュで奪った事は、一応付記しておこう。

初めてやった試合がダブルスとなったコスモスは、その鮮烈デビューで多くの後輩たちから尊敬の目を向けられるようになってしまい、戸惑っている様子だった。

でも良かった。これでコイツも卓球部に馴染めるだろう。

コスモスの上達ぶりにいちいち驚いていると、あっという間に三時間なんて経過してしまう。着替えと後片付けを済ませてネットを受付に返せば、後は解散するのみ。

公民館の中では迷惑になるので、解散の号令は屋外でやることにした。

既に薄暗い紺碧の空の下、俺一人を中心に据えて男女問わず全員が丸くなる。

「そんじゃ、今日は解散！ 明日からは現地集合で頼むぞ」

はい、と練習開始時と同じように返事をする部員たち。それから蜘蛛の子を散らすように家路につくため人波に紛れていった。

真ん中に突っ立っていた俺は帰っていく部員たちの背中を最後までで見送り、俺も帰宅しようと身を翻す。

――が。

数メートル先に、俺の行く手を遮る影があった。

シマトネリコというネームプレートが掛けられた街路樹が生み出す蔭のため姿は見えないが、どう考えても俺の進路を塞いでいるのは明白。走ってきたようで切れ気味の呼吸音がこちらの耳にまで届いてきた。

街灯の丸い光を挟んで向かい合っている俺と未確認の人影。

最近は何々と険しい視線を向けられることが多かったこともあり、誰かが俺を強襲しに来たのかと心拍数が上がったのは仕方のないことだと思う。

緊張に身を固くしていると、その人影は一步を前に踏み出して寒々しい白色の街灯の下に姿を晒した。

その正体とは――

「……………健二君」

――姫宮だった。

俺は戸惑う。あれだけ頑なに俺を見ようとしなかった姫宮が今、俺の目の前にいて、俺を見て、俺に語りかけている。

もう大丈夫なのか？ と声を掛けようとしたところで、姫宮の手に何か握られているのを認めた。遠目でも握りつぶされているため確信は持てないが、それが紙であることと大きさから予想して、俺が友人に渡してくれと頼んだ相川の手紙だろう。

「……………健二君」

もう一步を踏み出す。しかし、その歩幅は小さい。まるで、相反した二つの感情がせめぎ合っているように。

――心の中での恐怖と願望の決着が付いていないかのように。

おっかなびっくり。人に甘えたい、でも甘えるのが怖い、その葛

藤に打ち震える子犬のように、しかしそれでも懸命に前へと、俺の目の前へと進もうとする。

だから俺は、迎えには行かなかった。

ここに来るまでも多くの迷いや恐怖に襲われたんだろう。

手紙の言葉を信じていいのか。俺の元に来てもいいのか。そして、あの日の恐怖を思い出した。

それでも姫宮はここにいる。迷いを捻じ伏せるように全速力で走って。握りつぶした手紙からも、その時の気持ちが見え透っているように思える。

これが姫宮の正直な気持ちなんだろう。でも、その気持ちに忠実になるためには必要なものがあつた。

つまり、覚悟。

その手紙の言葉、引いてはその相手と向き合う覚悟を持って姫宮はここに来たのだ。

俺の方から迎えに行くのは、違う。姫宮が自分でこっちにこないという意味が無い。

なら待とう。ただ信じて。

「健二君……！」

「ああ、ここにいます」

「健二君！」

「ちゃんと待ってるから」

気持ちに反して脚が動いてくれないもどかしさに涙を浮かべる姫宮を見て、俺はふと考える。

姫宮は、どうしてこんなに頑張ってるんだ？

明確な悪意、その中でも最大のものであるはずの殺意というナイフを突きつけられた際の恐怖は想像のしようも無いが、手紙で反省の言葉を見たとしても、そう簡単に拭い去れるものではないだろうことは確かだ。

再びその恐怖に身を引き裂かれようと、乗り越えようとするのは何故なんだろう。

なんて思案していると俺の胸に衝撃が来た。その衝撃は温もりを持っていて、俺の制服を濡らし直接その温度を伝えようとしている。俺もその温度をもっと感じたくて、抱きしめた。

「頑張ったな」

「うん……うんっ……！」

気遣いなどではない、本心からの頷き。そのいじらしさに胸を打たれる。

「どうして、そんなに頑張れたんだ？」

「うう……っそんなの、決まってるよお……！」

俺の胸に顔を押し付けているのでくぐもって聞こえる姫宮の声。しかし解答ははっきりしていた。

「幸せになりたいから、健二君と一緒に幸せになりたいからあ！」

俺は『人の不幸は蜜の味』を地で行く人間を知っている。ソイツは人の不幸を見て幸せを感じるそうだ。あくまで傍観者の立ち位置で、物語の中心にいて一喜一憂している人たちの不幸だけをズームアップし、そうなっていない自分が幸福だと満悦を得る。

それこそが、本当の幸せだという。

でも。目の前の少女を見ると、そっちこそがただの逃げのように思えてくる。傍観者の立場にいるのは、ただ当事者となって幸せを勝ち取っていく事から逃げているだけなんじゃないか、と。背負う可能性のある不幸から逃げているだけなんじゃないか、と。

姫宮は待ち受けている恐怖にも悲哀にも逃げずに立ち向かい、幸せを勝ち取るためのフィールドにもう一度戻ってくることを選んだ。強さ、だよな、これは。

そして、アイツの考え方こそがどうしようもなく弱い。

悲しみを得るリスクを犯さずに幸せになろうとすることの方が、間違いなのかも。

自分が幸せを掴み取ることと蹴落とすことになる人々の不幸は、しようがないと割り切るしかないのかもしれない。

……………。

……どっちにしたって、世の中そんなものなんだな。

「帰るか。送ってく」

「……うんっ」

ともあれ姫宮は戦いの場に戻ってきた。

俺の呼び方が変わっていたのは、そのゴングがもう鳴っている証拠だろうか。

十四話

姫宮——いや、愛が卓球部に戻ってきてから、もうすぐ二週間。次に太陽が水平線から昇ってくる頃には卓球部の休部期間も終わりを迎えているはずだ。

相川と同じクラスの西岡さんが愛に対してどんな感情を持っているのか内心ビクビクしていたのだが、案外普通に話していた。時々ペアを組んだりもしており、どうやら西岡さんの敵は男である俺だけらしい。

相変わらずペアのいなかった俺は心優しい最強少年進士君に「しようがないなあ」と相手をしてもらったり、コスモスの練習に付き合っただけの凶刃の第一被害者になったりしながら過ごしていた。

そして本日、公民館での練習最終日。

練習開始前のミーティングに際して、部員たちの輪の中には二人男子部部長の俺と、女子部部長の愛が並んでいる。

「さて、本日も練習開始な訳だが……」

「今日でここでの練習も終わりだね。ってことで、皆に大ニユースがありまーすっ」

内容を知っている俺としては愛の浮かべる満面の笑顔が悪魔の微笑みにも見えた。

「な・ん・とお」

ほら。そんなにもつたいぶるから一年生たちが何か嬉しいニユースでもあるのかと目をキラキラさせてるじゃねえかよ。まあ休部期間が終わったからこそその話でもあるから嬉しいニユースに違いは無いんだけど。

さっさと言っちゃえ。それが皆のためだ。

「明日ランキング戦をやりまーすっ！」

「ええ——！」

不満の声が俺たちを四方から囲い込む。

「何が不満なんだお前ら。楽しい楽しいランキング戦だろうが」

「だって卓球場に戻って最初の部活ですよ。もうちょっとお祝いな、お祭りのなことしましょうよ」

「お祭りだろうが。ランキング戦」

「それは部長たちだけっすよ」

そう言う割に最強一年生進士君もソワソワしてるじゃないか。

不満を多分に含んだざわめきが体育館に響いていたが、そのまましばらくすると一年生女子からわくわくした感じの弾んだ声が漏れ始めた。

「でも今回の二年生の女子って、面白そうだよな」

「うんうん。相川先輩はいないけど、松本先輩との猛特訓で實力急上昇中の弓削先輩がいるもんね。台風の目になりそうな予感！」

コスモス、だいぶ期待されてるみたいだな。

確かにこの二週間でコスモスは滅茶苦茶強くなった。人を見てすぐに真似できるってのは俺が思っていた以上にすごい能力のようで、卓球部トップクラスの選手のフットワークを真似してすぐに身につけるし、物珍しいカットなんてものを目にした途端にじっと凝視して、次の瞬間には素晴らしいカットを俺相手に繰り出してきた。

砂漠の砂に水が滲みこむように技術を吸収していったコスモスの今の實力は未知数。はつきり言って、愛でも難しい試合になるかもしれない。

本人も同様に思っているのか一年生たちの声に顔を険しくして、目を細めてコスモスを睨んでいた。その愛らしい顔立ちゆえに相変わらずプレッシャー皆無だったが。

これまでずっと傍観者の立場にいたコスモスにとって注目されるっていうのは未曾有の事態なのかもな。目を大きく見開きながらパチパチと瞬きを繰り返している。

「ともかく。そういうわけだから、今日はいつも以上に気合入れて練習しろよ」

はーい、という返事には残念ながら気合は感じられなかった。

肩を落として台へと向っていく姿に苦笑いしながら、本日も俺にはパートナーがいらないかなー、と寂しい諦観でもって体育館内を眺めていると。

「健二くん」

「健二」

とある二人から同時に声を掛けられた。

その二人とは、

「あれ美月ちゃん。昨日の一年生の子はどうしたの？　なかなか息合ってたじゃない」

「愛こそ、毎日一緒に練習してるパートナーはどうしたのよ」

会話にあったとおりだ。言葉に棘があるのは気のせいだと思いたい。

「うぐ……………じゃあ！」

昨日だけと毎日では、練習相手を変えるのに分が悪いと判断した愛は作戦を変える。

結構卑怯な方向に。

「私は部長だから、健二君とちょっと部長同士のお話があるの。そのついでに一緒に練習しようかなーって思っているんだけど」

「あらそうなの」

表面的には平静だが、裏でどうなっているかは知らん。

「でも私も相手がいなくて困ってるの。ほら、今って部員が三十一人でしょ。奇数だから余っちゃうのよね、一人。で、それが私なのよ」

なるほど、妥協したか。

「だから、二人のところに私も混ぜてもらえないかしら？」

「うぐ……………」

再び言葉に詰まる愛。愛はさっき、自分は部長であるとそれとなくほめかした。そこを逆手に取ったコスモスが上手い返しをしたわけだ。部長だったら困っている部員の頼みを聞かないわけにもい

くまい。自分で自分の首を締めちまったな。

「はあ……………、分かった。一緒にやろう」

「ありがとう」

このとびつきリスマイルの裏にはどれだけの権謀術数が渦巻いているんだろうか。マキアヴェリの再来を予見しうるぶると震える俺の体。シバリングってやつだな。

相変わらず人気のダブルスの台は埋まってしまっており、どうも近頃空前のダブルスブームでも来ているっぽい。それは置いておいて空いていたシングルの台を確保すると、コスモスはラケットを持って我先にとサーブ練習を始めてしまった。一人でもできるサーブ練習を、だ。

その身勝手な振る舞いに面食らう俺たちだが、当のコスモスには正統な理由があった。天然であれ確信犯であれ、そのキョトンとした顔が邪惡に見えてしまうのは俺の誇大妄想もしくは被害妄想か。

「あら？ 部長同士でお話があるんじゃないやなかったの？」

こいつは自分に有利に働きそうな他人の言動なら一生でも平気で憶えていそうだ。また己の発言に足元を掬われた愛が半べそを掻く寸前のように鼻をすんすん鳴らし始めたので、そろそろ助け舟を出してやるとしよう。

「急ぎの用件でもないから後でいいんだよ。今は練習だ」

「……ふーん、そうなの」

なぜだか胡乱な目で俺を見つめるコスモス。なんだその倦怠期に突入した奥さんが旦那を見ているような視線は。

「まずは二人でどーぞ。俺はちよっくら他の台巡回してくつから」

部員たちが部長である俺のアドバイスを聞いてくれることを祈りつつ、俺はその場から離れ——ようとしたが唐突に腕を引っ張られたためにできなかった。

何事かと振り返ってみれば、愛が俺の体操服の袖口をぐわしっと掴んでいた。

「……………何だ？」

「混合ダブルスの練習しよう！」

「……ダブルスが回ってきたときに練習すればいいだろ」

「その時にすんなり入れるように、こっちで練習しよう！」

チラツとコスモスを見てみればラケットとボールでジャグリングを始めていた。自分の才能を持て余して、暇潰しでさえ高度な事をやっつてのけるのはもう見慣れた感がある。

「……ちなみに、俺の相棒はどっち？」

「……どっちがいいの？」

そう来たか。

ドラマなどで見ていて、俺はいつも思う。こうした『どっちがいいの？』という問いは選択肢を二つ用意しているように見せかけているだけで、最初から片方しか選べないように細工されているのではないかと。その高度な精神的トリックの鍵は、目の前の愛が現在遂行している上目遣いであるのは間違いない。

こんな目をされて期待を裏切れる男がいたら見てみたい。ちなみに俺は無理だ。

というわけで――

「えへへー」

愛になった。

「いくよ、美月ちゃんっ」

「……ええ、どうぞ」

いい加減その自分じゃない女の髪の手を見つけた倦怠期の奥さんみたいな目を止めてもらえないか。俺にそんな筋合いは無い。

「そー……れっ！」

初めはにこやかだった愛もサーブを打つ瞬間には牡鹿を前にしたスナイパーの目になっていて、卓球始めてまだ一ヶ月もたっていない新入部員に向けて己の必殺サーブを仕掛けた。どんな意図があったのかは訊かないでおこう。

コスモスに対して遠慮すると痛い目に遭うのは過去の俺を見て確認済みだろうしな。

今の愛の下回転サーブは九分九厘、大会でも使っている実戦用サーブだった。

そう、本気だったのだ。

「……………っ！」

バチコーン！と。

——その本気を真正面から打ち砕かれた。

返せなかった俺を誰も責められまい。愛が障害となってしまうって物理的に取れないコースに打たれたんだから。

愛の下回転サーブは強力だ。これを無理にドライブで返そうとしたらほぼ百パーセントの確率でネットに掛かってしまうので同じ地区のライバルたちの間でもセオリーどおりツツキで返すのが常識となっている。

なのにコスモスは常識などお構い無しに高速ドライブで打ち返した。

もちろん不可能ではない。打つときのラケットの角度を上手くすれば返せないこともないだろう。しかしそれは、愛と同レベルの人たちでさえ諦めるほどの技術なのだ。

コスモスはいつも通りの涼しい顔で『どうしたの？』とでも言うように可愛らしく首を傾げている。その仮面の下にあるのは性悪などや顔だろう。

愛の絶対の自信を液体窒素に数十秒浸した薔薇の花みたく木端微塵に粉碎したんだから。

「あら、愛どうしたの？」

塩をかけられた菜っ葉みたいにへなへなと崩れ落ちる愛を無邪気に眺めながらそれを言うか、この確信犯め。

「文明の更なる発展に思いを馳せてるんだよ」

「？ 相変わらず意味分らないわ」

「俺だって分からねえよ」

愛の肩を叩いてやるが、反応は返ってこない。手首を掴んで確認してみるとちゃんと脈は動いており、ショック死は避けられたよう

で一安心。

しかし立ち直るまでには相当な時間が掛かる事が予想された。

「どうしてか愛も動かなくなっちゃったし、私たちで練習しましよ
う」

どうしてか、ってか。なんてヤツだ。

「お前さあ」

「名前」

しまった忘れてた。

「美月さん、さあ」

「何かしら」

「愛はある意味病み上がりなんだから、不幸に陥れて楽しむの止めてくれないか」

「あら、気付いてた？」

ここまであからさまに俺に付いて回られたらな。

「今の實力なら他の人を相手にすれば、ほぼ確実に勝てるだろ」

「んー、けど。どうしてか無性に愛の不幸が見たいのよね」

それはただのイジメではないだろうか。

「第三者的に妥協した幸せが本当の幸せなんじゃなかったのかよ？」

「？ どうしたの、急に？」

「気付いてないのか？ 美月さんがもうとくに第三者の立ち位置じゃなくなってるの」

コスモスは顎に人差し指を添えて首を傾げる。それが絵になるから始末が悪い。

「……そういえば、そうね」

「だろ？ もう今では自分で手を下して他人に不幸をプレゼントしているわけだ。これじゃあ敬遠していた他人の恨みを盛大に買うことになるぞ」

「確かにそうなんだけど。でもどうしてか愛がいいのよ。私レスビアンだったのかしら」

変なカミングアウトをするでない。

「まあ、そうね。これから少し抑える事にするわ」

「……少しなのか」

「ええ、少しよ」

あまり期待できそうにないな。

十五話

再起動するまでに一時間以上を要した愛。はつと顔を上げた頃には、俺たちのダブルスの順番は終わってしまっていた。

河豚みたいに膨れていた愛は、不謹慎かもしれないが可愛かった。ネットを受付に返却する際に部員を代表してお世話になったことのお礼を言い、外で解散の挨拶を済ませると時刻も過ぎており、辺りには夜の帳が下りていた。

もう十月だからな。だいぶ日も短くなった。

部長二人で部員たちを見送り、それじゃ俺たちも帰るか、となつたところで、

「私も一緒にいいかしら？」

またもや自称レズビアンが接近してきていた。いつの間にか日本も随分オープンな社会になったもんだ。

「……帰ってなかったのか」

「体の火照りが冷めなくて。ちょっと夜風に当たっていたのよ」

火照りとか言っつな。部活中からの会話の流れを考えると色々ババァ。

隣を見てみれば愛が断固拒否とでも言うように、俺に向かってふるふると首を横に振っている。これはさすがに無視するわけにもいまい。

そこで思い付いたのは、先ほど有耶無耶にしたままだった話題。

「これから部長同士の話があるんだ。スマンが、今日は一人で帰ってくれ」

こうはつきり言えばコスモスも諦めるだろう——ってのは安易な空想に終わり、俺に先見の明が無いことを自覚せざるを得なかった。「だったら私もそのお話聞いてみたいわ」

歩き出していた俺と愛に追いついてくると、問答無用で俺を挟み愛と反対側に並ぶ。抑えるところかエスカレートしている気がする

つてのは気にしない方がいいのか。

愛がむくれているのでどうにか追い返せないものかと俺が思索の淵に没入したところでコスモスは言葉を繋げてきた。

「それって部長になったら必要になってくるお話なんでしょう？」

きつと、今の愛にとって最大の地雷を自ら踏んだ。

「……………それって、どういう意味かな」

声のトーンが落ちたことに俺は焦燥を覚える。それを知ってか知らずか、コスモスは俺に口を開く暇を与えなかった。

「あら、伝わらなかつたかしら？ 私が部長になった時に必要になるかもしれないから、ってこと。最近じゃあ俄然現実味を帯びてきたし、こつちとしても準備はしておいた方がいいかなって思ったのよ」

なぜ人から憎悪を向けられる事態を懸念していたお前が、そんな相手の神経を逆撫でするような言い方するんだよ。

「……………なれると、思ってるの？」

いよいよ愛の声がデンジャラスな域にまで低くなってしまった。

これはマズイ。

「落ち着け愛。美月さんも止めろ」

「ええ、思っているわ」

どうにか仲裁しようと思を掛けるのだが、俺の言葉は鼓膜に触れる前にシャットアウトされるようで聞いちゃいなかった。馬だつてもう少しはまともに念仏を聞いてくれそうなくらいに。

もしくは聞いた上で無視しているのか。でも、そうだとしたらコイツがそんなリスクを犯す意味は何だ。意味が分からない。

そもそも最近のコスモスはおかしかった。出会った時からおかしかったって話もあるが、最近はそれに輪をかけて変だったのだ。

やたらと愛にちよっかいをかけ、俺にもよく話しかけてくるようになった。

傍から見たら、俺を略奪しようとしているみたいに。

——まさか。

そこまでするのか。他人の不幸を見たいがためにそこまでするのかよ。外から眺めているだけだったコイツの心変わりがいつどこであつたのかは知らんが、このままではいつかの二の舞になってしまう。

今歩いている通りには幸い人影が無い。ちょっとくらいなら声を張り上げても大丈夫だろうと高を括った。

「止める二人とも！」

「健二君は黙ってて」

「黙ってられるか！」

二人の手を取り強引に握手させようとするのだが、それを察知した二人は俺を間に入れて睨み合いながら先手を打って拳を握ってしまつ。

「ごつん、とぶつかつた振動だけが無慈悲に俺の手に伝わってきた。

「私はね」

拳を開こうとはしない。

「奈津子ちゃんと約束したの。私と奈津子ちゃん、部長になるのはどっちか。奈津子ちゃんが帰ってきたら、私たちで決着をつけるの」

愛のものとは思えない冷徹な声音。鋭利に細められた愛くるしいはずの目元。

間近で目にしたその圧力に、俺の喉は引き攣った。

「あら」

コスモスはこれ見よがしにキョトンとしながら「何を言ってるの、この人？」と視線で愛を挑発。

「でも部長ってランキング戦一位の人がなるんでしょう？ 私が一位になつてしまえば何も問題ないんじゃないかしら？」

「させるわけじゃない」

「でもね。あなたが部活に戻ってきてからずっと、あなたの实力を見てきたけど、なんだか負ける気がしないのよ。何と言つてもこつ

ちは、あなたがサボっていた時からずっと卓球部最強の男子にコーチングしてもらってたんだもの」

俺の話題を出すことで、更に愛の頭に血を上らせようとしているのだろうことは明らかだ。なのに今の愛はそんなバレバレな意図にも気付けない状態だった。

一方のコスモスも、見せ付けるように俺に流し目をくれることか
らして、愛の心の逆鱗に触れる意志がありありと窺える。

「……………何が言いたいの？」

「分からない？ 愉快なおつむね」

見下しつつ鼻で笑う。こんな下衆い顔もできたのか、お前は。

くそ、この先の言葉を言わせたらいけない。それなのに引き攣つて、しかもカラカラに乾いている喉は声を発せられる状態に無い。無理矢理声を出そうとしたら嘔吐いてしまいそうだった。

こうなったらとコスモスの口を塞ごうと手を伸ばすのだが、あっさりとかわされてしまう。自分でも驚くほど緩慢だった動き。緊張していたのは喉だけではなかったらしい。

そして、言葉は紡がれた。

紡がれてしまった。

「愛でもなくて、奈津子でもなくて。本当に健二のパートナーに相応しいのは、私じゃないのかってことよ」

空気が止まった。

周囲に人がいなかったとはいえ、それでも自然と耳に入ってきていた遠くの喧騒も、今では聞こえない。鳴虫たちの合唱も鼓膜には届かない。まるで空気自体が音を伝達する仕事を放棄してしまったかのように。

そんな中。

——バチンッ！ という薄い紙が張り裂けたような鋭い音だけが、
やけに大きく脳天に響いた。

「痛っ……………」

コスモスの正面に回った愛が、コスモスの頬を張った音だった。

愛の表情には何もない。喜びも怒りも哀しみも楽しみも、全ての感情が欠落してしまったような、マネキンみたいな無表情。

ビンタされた方のコスモスは一瞬痛みに顔を顰めたものの、すぐに元の不敵な笑みを取り戻し、さらに言葉を重ねる。

「実力で勝てないからって暴力？ 単純——！」

バチンッ！

しかし今度は一発で終わらなかった。

バチンッ！

往復ビンタ。両頬を張られたコスモスはさすがに頬を押さえて蹲ってしまう。その様子すらも据わった目で見下ろしている愛。俺がようやく体のコントロールを取り戻したのはその陰惨な目を見た瞬間だった。

「止めろっ！」

一足遅かったが、これ以上愛に手を上げさせないように後ろから肩を抱きしめ、そのまま軽い身体を少し持ち上げるようにして後ろに下がらせる。案外素直に従ってくれたと思ったら、愛はいつもの穏やかな印象を取り戻して、自分の肩に回された俺の腕に軽く触れてきた。

まるで、掛け替えのない宝物を撫でるかのように、愛おしそうにそれから口を開く。

「分かる？ 健二君が抱きしめたのは私。健二君が選んでくれたのよ、私を。あなたが入ってくる隙間なんてないよ」

心までは取り戻していなかった。

いつもの愛ならこんな言い方はしない。

俺はコイツほど部長に向いている女子は他にいないと思っていた。軽口を言っている、そこには聞いている人に気付かれないような多くの配慮が感じられ、後輩の指導に当たる際もどうしたら分かりやすく伝わるか、どういう言い方なら正しく伝えられるか、それをいつも考えていた。

同じ部長という立場だからこそ分かる愛のその優しさこそが、俺

が好きになった理由かもしれないかった。

しかし、今の愛にはそれがない。

自分が選ばれた事を嬉しく思うならいい。他の人を蹴落としてしまったことに申し訳なさを感じるのもいい。

でも、選ばれた人が選ばれなかった人を貶すのは違うだろ。

愛にはそんな人間になつて欲しくなかった。

だからこそ、俺は愛を諭――

「……どう？」

そうとしたところで、コスモスの呟きに機会を奪われた。しかしながら、その呟きはこれまでの舌戦の相手であつた愛に向けられたものではなくて。

いつか見た、とびっきりの笑顔で俺に届けられたものだった。

意味が分からない。今の会話の流れで『どう？』と問われても『何が？』と返すしかないだろう。

俺の困惑を見透かしたように蹲つたままのコスモスはくつくつと小さく笑つと、もう一度俺に問うてきた。

今度は俺にも分かるように、明確に。

「幸せ？」

それは俺が今、愛に抱きついていることがか？

そもそも会話の流れが幸せとは真逆の方向だったろうが。

ニコニコしたまま黙っているの、俺の答えを待っているのだろう。正答なんて分かりやしないから正直に答えるしかない。

「……いんや」

「そう。……あなたはまだ幸せになつてくれないのね」

立ち上がり、両手を広げた。

「もっと私を見て」

意味不明な会話に付いていけず呆けていた愛も、それには瞬時に頭を沸騰させる。

次の瞬間、愛は精一杯足を伸ばしてコスモスに蹴りを入れようとした。なりふりなど構わずに。

そこには、ただの害意しかなかった。

「見ないよ！ 見るわけないでしょ！」

無我夢中で足を振り上げる。何度も、何度も。

いつしかその目からは、白色の街灯でキラキラと光る雫が散っていた。

その姿の何もかも、見ているのが辛かった。

どうしてだろう。これまでクラスの男子や卓球部の同級生から氣遣われた時は堪えることが出来た涙が、こんなにも溢れそうだ。

こんな涙こそ、絶対に流したくないのに。

コスモスは、それでも訳の分からない懇願を続ける。

「見て！ もっと私を見て！」

叫ぶ、また叫ぶ。

どう見たって危険な、緊迫した状況。

「おい！ 止める愛っ！」

愛を離させながら声をかけ続けたが愛はじたばたする動きを止めようとはしない。親の仇敵でも見つけたような顔で、ただ目の前の少女を睨みつける。

あまり見たくない、痛切な表情で愛は振り返った。

「……なんで庇うの、健二君？ ねえ、なんで？ まさか、この子のことが好きとかじゃないよね？」

クルツと反転して俺の両腕を掴む手には、男ですら痛みを感じるほどの力が込められていた。

「違う！ 違うから、とりあえず落ち着け！ な？」

じつと愛の目を覗き込む。俺の目を覗き込ませる。

そして、再び静寂が訪れた。空気が凍り付いてしまったのかのよう、呼吸するたびに肺が痛む。それでも俺は目を逸らさない。

「憶えてるだろ？ この場所」

弾かれたように辺りを見渡す愛。

シマトネリコの街路。

寒々しい白色街灯。

愛が己の中の恐怖に打ち勝ち、立ち向かう覚悟を決めた場所。

「あの日の愛を思い出してくれ。頑張つて頑張つて、幸せになるために俺のところに走ってきてくれた、強くて優しいお前を、思い出してくれ。頼むから」

「……ふえ……」

強く強く俺の腕を掴み、そこに確かに存在することを確認する。

それから俺の胸に顔を押し付けると、そのまま声を押し殺して空知らぬ雨を降らせ始めた。

「いつも強くななくていい。でも弱さを見せるときは他の人に当てるんじゃないくて、俺に向けてくれ。ちゃんと受け止めるから。お前の弱さを、俺も一緒に持ってやるから。これから俺も、きつと愛に弱いトコ見せるはずだし。それを愛にも持ってもらって、それでお相子だ」

擦りつけられた首の動きからして、頷いてくれたんだろう。

夜になれば多少肌寒く感じるようになってきた今日この頃。胸に降り注ぐ熱い涙は、心臓を温めるのに丁度いいかもしれない。

「あら、フラれちゃったわね」

腰に両手を当て咳かれた暗いニュアンスの言葉は、しかしさっぱりした表情から出ていた。

全くこいつは、いけしゃあしゃあと。

「好きな子を苛めたい小学生男子みたいに調子乗ってんじゃないよ。また卓球部が休部にでもなったらどうするつもりだったんだ。今度こそ俺は辞めにゃならん」

「違うわよ」

「何がだ」

「私がレズビアンだってこと」

ここにきてその話題か。

「……だったらどうした」

ウンザリしつつ言い返す。

お前がレズビアンだろうがそうでなかるうが俺には関係ない。

しかしコスモスが言いたかった核心は、そんな部分ではなかった。

コスモスは例のとびつきりスマイルを浮かべると、こう言ったのだ。

「私、あなたに幸せになつて欲しかった」

予想外の言葉にポカンとしている俺から視線を切り、言い終えろとすぐに反転して背中を向ける。それから既に真つ暗な空を仰いだ。

「私には、これしか思いつかなかった」

顔面に腕を持つていく。袖で目元を押さえる仕草。

それでも拭いきれなかった雫が、白く煌めく。

それはあたかも、遠くにあつて掴めない、星のようだった。

「幸せになる方法を一つしか知らない私は、こうすることしか思いつかなかった」

上げていた腕を勢いよく下ろすと、両手を背中側で組んだ。

「こうして私の不幸を見てもらうことしか、思いつけなかった」

日本の都市圏では、もう殆ど星空は見られない。

その真つ黒なスクリーンにも今日は、一つだけ強い煌めきを放つ星が見つけられた。

「初めてなのよ、こんな気持ち」

コスモスは、覚束ない視線を括り付けられるものを探していたのか、その星を見つけると顔の動きを静止させる。

すぐにでもへたり込みそうになるのを堪えるように。

その頼りない光に、縊るように。

「誰かに不幸せになつて欲しいとは何度も思つても、誰かに幸せになつて欲しいなんて思つたこと、これまで一度もなかった」

唯一動いているはずの口元も、こちらからでは見ることはできない。

「私の父、今どこにいますか？」

突然の問いかけ。コイツのこれまでの言動を推測すると、答えは一つしか浮かばない。

「宇宙、とか？」

もう星になっっている。つまり、既にこの世を去っている。

そうとしか考えられなかった。

「ふふ。それだったらどれだけ良かったかしら」

どうやら正答ではなく、その実感の込められた言葉は、痛々しいほどに切なかった。

そうして、コスモスの口から紡がれた正解は、そんな生温い予想を嘲笑うような衝撃を伴っていた。

「父は今——刑務所にいるの」

良くニュースなどでは耳にする単語ではあるが、しかしそれはメディアを介した音声情報ではない。

実際に肉声による発音で、その単語を耳にすると、こつも強烈なのか。

自分には縁遠いと、遠目から笑っているだけだと思っていた場所が、思ったよりも身近にあった。

途端に足元が心許なくなった。

隣からも、息を呑む気配が伝わってくる。

「複数の女性と不倫した挙句、母にバレてその全員を殺そうとしたそうよ。幸い、全員が無事だったらしいけど、殺人未遂、傷害罪、その他諸々余罪が付いて懲役六年。法廷で反省の弁なんて何一つ言わなかったらしいわ」

笑っちゃうわね、とコスモス。

ふざけるな、と。そう思う。

父親のこともそうだが、何よりこの壮絶な過去を自ら口にして、それを笑いながら言おうとしているコスモスに対して。

何気なく言っているが、今、どれだけの痛みが伴ったのか。

それを伝えろ、と。そう思う。

「母や親戚の人が私をマスコミから守ろうとしてくれたし、その地域からも引越したんだけど、その話が——私が一時期大きなニュースになった犯罪者の娘だったことが、どこからクラスメイトに伝わったらしくて」

その結果なんて目に見えている。まず一部からの無視が始まり、続いてクラスのほとんどを巻き込んだ嘲笑になり、嫌悪になり、やがてイジメに発展する。そうなってしまっただけでは、数多の学生が満喫しているであろう中学校生活が、一片も残らず消し去りたい記憶に早変わりする。

俺の予想は、あながち外れてもいなかったらしい。

抑揚の無いコスモスの平坦の声色。思いつくのも嫌なのだろう。「何度も引越したけど、噂は付いて回ってくるのね。どこに行っても結果は同じだったわ。それでも時間の流れの中で騒ぎは収束していったけれど、落ち着いた頃にはもう、私は周囲との付き合い方を忘れてしまっていた」

結局、一人なのは変わらなかった、と。

皮肉だな。

でも、とても人事ではなかった。

もしその場に俺がいたら、どうしていただろう。

改めて自問するまでもない。

俺だって——コスモスを追い詰める有象無象の一人になっていたに違いない。

逆に俺が彼女の立場だったら……

そう考えてすぐ、俺は続きの思考を放棄した。

放棄し——逃げてしまった。

それが何より俺を苛む。

自分の情けなさに、彼女への申し訳なさに、もつと簡単に言うなら度胸も勇気も何も無い己の弱さに、彼女からしたら願い下げだらう後悔を得る。

次の一瞬、俺はコスモスの背中を見つめていた顔を伏せてしまった。

「友達の作り方なんて指南本があるとしたら、それはきっと相対性理論より難解よ」

そんな押し殺した苦笑に釣られるほど、俺たちは馬鹿じゃない。

「どうにかやり直そうとした。なのに、世の中まならないものよね。何もできないまま、そのうち教室で談笑する声が煩わしくなった。私は孤独、周りはグループ。何だか腹が立った。理屈なんて何も無い」

その頃なのだろう、コスモスが幸福について考えるようになったのは。

あの空しい結論に至ったのは。

「今考えるとお門違いもいいところだけど、それを心に押し込めて我慢できるほど大人でもないのよ、私。あなたと一緒に」

上空に向つての独白は、冷えた空気に溶けていくように、仄かに滲んで届いた。

「今の高校に入ってもそれは同じ。周囲のクラスメイトが笑顔を浮かべている中で私一人だけ俯いてた。時々話しかけてくれる子はいたけど、すぐに他の子に止められたりして。集団生活してる人間なんて薄情なものよね。集団から外れる事を怖がるから」

シニカルな語り口に、俺は少しだけ共感を覚えると同時に、こんなにも見苦しいものなのかと身震いした。

「何の感慨もないまま二年生になって、何の気概も湧かないまま四ヶ月を過ごして」

一旦、言葉を止めた。その先のセリフによって大きく動くはずの、自分の中の気持ちを整理でもしているのだろう。

俺も、覚悟しておこう。

「——あなたに出会った」

いつしか泣き止んでいた愛も、コスモスの話に聞き入っている。それが彼女の心の内を認め、受け止めようという気持ちの表れなら嬉しいよな。

「比喻でも何でもなく、生まれて初めて誰かと触れ合った気がした。そっけない態度取ったけど、凄く嬉しかったのよ。あなたの言葉」演技派だな。そんな様子これっぽっちも見せなかったくせに。

「あなたが帰ろうとした時、どうにか引きとめようとして話しかけた。そしたら、何だか私と似ている気がしたのよね。言葉遣いが擦れてるところとか」

小さすぎた苦笑は吐息だけ。

「次の日、あなたがよく卓球で表彰されてるのを思い出して卓球場に行ってみたら、あなたは沢山の人に囲まれて笑顔を浮かべてた。それが無性に悔しくてね。何が悔しかったのかは私にも分からなかった。その時は」

晒し者じゃなかったのかよ、とは口には出さない。ただ黙って続きを待った。

「でもね、気付いたのよ。あの日、廊下で奈津子の叫びを聞いたときに」

胸元で愛が息を呑んだのが分かった。予想できたんだろう。その言葉の続きが。

「この気持ちは、奈津子のそれと同じなんだって」

愛は目を伏せる。逆に俺を掴んでいる手には力を込めた。

「あなたが他の女の子と笑い合ってるのが悔しかった。私以外の女の子と楽しそうにしているのが凄く嫌だった。新鮮だったわ、私が言うのも何だけど、こんなに黒い気持ちは初めて感じたから」

それでも俺の気持ちは愛に向いている。それを伝えるように愛の手に力を返した。

「どうしたらいいんだろうって考えて、自分の将来とかそんなもの以上に一生懸命考えて思いついたのは、あなたに私の不幸を見てもらって幸せになってもらうっていう、どうしようもなく救いようのない方法だけ。さすがにこれまでの私の人生を恨んだわ」

ふふ、という笑い声が今度は鼓膜に届いた。笑みの種類は自嘲だろうか。

「でも、それでもあなたは幸せになってくれなかった。あんなに痛い思いしたのに、何の見返りもなし。まったく、割に合わないわ」

……全く。なるわけねえだろ。

「幸せになんかなるわけねえだろ」

「……あなたもドSね。これ以上追い討ち掛けるなんて」

「違う」

はつきりと口にした否定の言葉に、コスモスは反射的に振り返った。それを待ち構えていた俺はその視線とばかり目を合わせた。いつかの仕返しだ。

せめてもの情けとして、赤くなった目元には触れないでおいでやる。

「あるとき美月さんが言ってた幸せには、一つ前提条件がある」

「……………なに？」

「不幸せになるのが、赤の他人でなきゃいけないってことだ」

真面目に語る内容でもないな。なので俺は苦笑に表情を改めた。

「残念ながら、俺たちはもう赤の他人ではない」

「あー、婚姻でも結んでくれるのかしら？」

飛びすぎだ、ボケ。

「友達だ」

「……………」

そう。目を見開いているお前が難解だと言った、あの友達だ。

「残念ながら、友達が傷付いているのを見て嬉しくなれるほど、俺の心も、この世界も、荒んじやいないんだよ。残念ながら、な」

「……じゃあ、どうすればよかったのよ。私にはそれ以外に思いつ

かないのに」

コイツ、卓球に関してはあんなに器用なのに、こういう人間の機微みたいなどころにはてんで不器用なんだな。

相変わらず神様も人が悪い。長所と短所、バランスよく配分してくれちゃって。

「俺だってよく分からねえよ。同じく恋愛ビギナーなんだから」

「女の子に修羅場演じさせた人がよく言うわ」

うぬ……、そう返されると言葉に詰まる。

「でもさ」

急に愛が俺を見上げてきたと思ったら、俺の手が自然と愛の頭を撫でていた。

「あんだけすぐに卓球の動きを憶えられたんだ。愛や、相川の様子を見てたら分かるんじゃないか？ どうすればいいかなんて」

「……分からないわよ」

物分りの悪い生徒は困る、なんてな。ちよつとした意趣返しに心を良くしたので、そろそろ俺なりの解答をレクチャーしてやるか。

「多分だけどさ、どうもしなくていいんだ」

「？ どういうこと？」

「俺はさ、愛に何かをしてもらったから好きになったわけじゃない。もちろん伝えられた言葉で心臓がバクバクした事はあるが、それだって特別な事じゃないだろ？ つまりさ、そのまんまの自分で会話してればいいんだ。そこに気持ちが表示れて、性格が表示れて、それを見たり聞いたりした好きな人に自分の事を知ってもらう。逆に相手のことを知ろうと、たくさん話しかけたりもしてさ。そういうものの積み重ねが恋愛になるんじゃないかって、ひねくれた俺は思うぞ」

ふう、長いモノローグだった。

恋愛なんて語れる年齢ではないのは百も承知だが、それでも何も分かってないコイツになら考え方の一つを教えてやるのもいいだろう。

相川のぶー垂れた顔を思い出す。心で何かを思ったところで、口

に出さなければ、それは人には伝わらない。表面を取り繕って、違う自分を演じていたら本当の自分を見てもらうことなんてできない。それだけなら簡単にも見えるが、ところがどっこい、これがまたかなり難しい。

好きな人の前でいいカツコを見せようと理想的な自分を演じる。それは裏返せば本当の自分を見せて嫌われる事への恐怖でもあるはずだ。そりゃそうさ。本当の自分が嫌われたら完全に望みは絶たれるんだからな。

でも、本当の自分を見せ合って好いたもの同士なら、それこそ一生のお付き合いになる可能性だってあるだろう。ま、そんな人と出会える可能性がどれだけかは知らないけど。

それでもやつぱり、この世界では確かに一生を添い遂げようと誓い合った夫婦が次々に生まれている。もちろん離婚する夫婦もその中からは出てくるだろうが、そんなネガティブな話題はどうでもいい。最初から離婚を前提として結婚する人なんていないんだから。何が言いたいかって、やはり夫婦ってというのは、ちゃんと自分に合った人を見つけ出した結果なのだ。

そう、どこかでお互いに妥協してさ。

そこから最大限の幸福を得ようと努力する事で夫婦というものが成立していく。

ポジティブかネガティブかの違いは有れど、コスモスの言っていた『妥協』という言葉は的を射ていたのかもしれないな。

今は夫婦の例を出したが、夢に関しても同じ事が言えそうだな。

人はきつと、夢に優先順位をつけるのだ。その第一志望から実現できる可能性を吟味していつて、叶えられそうになればバツテンをつけて一個下へと降りる。それを繰り返し己に実現可能な夢の中で最大限に幸福を感じられる場所を見つけて、そこで『妥協』する。

これこそが、上手く行ってる人間社会のシステムの根幹なのだ。
『妥協』っていい言葉だな、と俺が変質的な結論を得ながら、そんな結論を導くきっかけとなった人物のことを思い出した。

その人物——コスモスはどんな反応をしているかね。自分の過去と照らし合わせて何事かを考え込んでいるだろうか。俺の威厳ある持論に感涙を流しているだろうか。

果たして結果は——

「ふあああゝ」

——欠伸を、していやがった。

「……………」

……それはないだろう、いくらなんでも。こっちはあんな小つ恥ずかしい長台詞を送ってやったというのに。

俺の険の籠った視線に気付いたのか、コスモスはいつかみたいに俺を宥めるように手をひらひらさせ、

「だって長いんだもの」

この恩知らずが。

「でも、これが素の私よ」

「なに？」

「だから、これがそのまんまの私」

「……何が言いたい」

「あら、好きになつてくれないの？」

「なるかボケ！」

俺の魂のシャウトを叩きつけてやるとコスモスは五月蠅そうに耳を塞いで、子蠅が集団飛行している球体ゾーンに突入してしまったかのように顔を険しくした。

「何よ、結局違うんじゃない」

「お前の捉え方が間違ってるんだつつうの！」

俺だけが体力を消費する言い争いに、しかし先ほどまでの陰悪な

ムードは微塵も無かった。その証拠として、先ほどまで険悪ムード形成因子であつたはずの愛が、今では小鳥の囀りのように小さく笑っている。

この上手くいつてる世の中を生きている人々の雑踏や、むしろけたたましくもある虫の鳴き声。街路樹の立てるさらさらした葉擦れの音まで、全てが俺の外耳道に我先にと侵入を果す。

戻ってきたいつもの空気に俺は胸を撫で下ろした。が、

「愛」

と、コスモスが呼ぶ声を聞いてもう一度ビクツと身体を緊張させた。この期に及んで何を言うつもりだ。

「あなたたちの恪気諍いに、私も入れてくれないかしら？」

「……ふっふふ、あははっ」

突然の笑い声に背筋を震わせる俺だが、それはしかし、いつもの愛のスタッカート気味な笑声だった。

「つかリンキイサカイって何だ？ ……」『リンキー酒井』？ 誰だその一発屋の臭いがぶんぶんする芸人は。最近流行ってるのか？
リンキー酒井。

愛は普通に分かつているらしい。女子には人気なようだ。

「はは。うん、分かった。いいよ。あんなに言われちゃったら断れないよ。皆、気持ちは一緒なんだもんね」

「ふふ、ありがとう」

「いいえ。趣味が一緒ってことは気が合うつてことだもん。これからは仲良くなれそうだし。だから」

愛は俺から身体を離すと、コスモスと正面から相對する。そして、
「さっきはゴメンね、嫌なこと言って」
頭を下げた。

「別にいいわ。それくらいじゃないと私も張り合いが無いから」

「言ってくれるね。でも、負けるつもりは無いよ。今現在の部長は私だってこと、忘れないでよねっ」

ランキング戦の話か？ だとしたら恪気諍いってのはランキング

戦の隠語か。

——なんてボケをカマスほど俺は鈍感ではないのだ。さすがにもう意味は読めている。

俺の今の状況は『女難』って言うのだろうか。結構満更でもなかったりするのだが。

でもこの関係は、ちよつとした外力が作用しただけで簡単に争いの火種になるだろう。俺だって満更でもないとか気を抜いてもらえないな。

ともかく俺は今、愛の彼氏なんだ。

それをもう一度自覚しよう。

ふと見上げた空は滲んでいて、等間隔に並ぶ街灯や遠くのビルの明かりが視界一杯に広がっている。

満天の星空に、見えなくもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8195k/>

金木犀のプラネタリウム

2011年2月11日19時10分発行